

上峰町文化財調査報告書第17集

# 堤六本谷遺跡 I 屋形原遺跡 II

平成2・6年度佐賀県農業基盤整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

上峰町教育委員会





上峰町文化財調査報告書第17集

# 堤六本谷遺跡 I やかたばる原遺跡 II

## 平成2・6年度佐賀県農業基盤整備事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2000年3月

## 上峰町教育委員会





堤六本谷遺跡1区全景（写真上方が北）



堤六本谷遺跡2区全景（写真上方が北）



堤六本谷遺跡3区全景（写真上方が東）



屋形原遺跡 3 区全景 (写真上方が東)

## 序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めてまいりました。

この報告書は、平成2年度及び平成6年度に実施した堤六本谷遺跡と屋形原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。両遺跡の調査では、奈良時代の遺構や遺物を中心に縄文時代から近世に及ぶ人々の暮らしの跡が発掘されました。堤六本谷遺跡では、近世の遺構・遺物がまとまって検出され、かつてこの辺りにあったと言われている「大鳥井」集落の存在が確認されました。また、屋形原遺跡では、縄文時代の土壙から石錐が出土し、比較的資料の少ない漁撈の分野の解明に欠かせない貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成12年3月

上峰町教育委員会

教育長 古賀 一守

## 例　　言

1. 本書は、平成2年度及び平成6年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が国庫補助事業により発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷及び字一本松に所在する堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成11年度佐賀県営農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、国庫補助事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。
3. 発掘調査は、平成2年度及び平成6年度の農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について年度ごとに便宜的な調査区域を設定し、国庫補助事業として、上峰町教育委員会が実施したものである。
4. 各年度ごとの調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである

年　度	遺　跡　名	調査地区名	調査面積	調　査　期　間
平成2年度	堤六本谷遺跡	1区	1,240m <sup>2</sup>	平成2年6月8日
		2区	710m <sup>2</sup>	§
		3区	3,250m <sup>2</sup>	平成3年3月26日
平成6年度	屋形原遺跡	3区	1,750m <sup>2</sup>	平成6年7月20日 § 平成7年1月31日

5. 屋形原遺跡は、昭和53年の宅地開発に伴い発掘調査が実施された約4,000m<sup>2</sup>の調査地区を1区、平成6年度農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査区域のうち佐賀県農林部委託事業として発掘調査を行った地区を2区と呼称する。
6. 現場での遺構実測作業は、平成2年度は一部を、平成6年度は全部を、それぞれ有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、気球による遺跡の全景などの空中写真撮影については、各年度とも有限会社空中写真企画に委託した。
8. 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、随時、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
9. 本書中の挿図・実測図作成、拓本、トレース作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
10. 本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
11. 本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

## 凡　例

1. 堤六本谷遺跡及び屋形原遺跡の略号は、それぞれ「TTR」、「YKT」であり、調査区略号は、堤六本谷遺跡1区を「TTR-1」、屋形原遺跡3区を「YKT-3」とした。
2. 遺構番号は、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01、02などの2桁の番号を組み合わせて表記した。  
S H……堅穴式住居址 S B……掘立柱建物址 S K……土壤 S D……溝跡・溝状遺構  
S X……性格不明遺構・その他  
例) SH101 1区の1号堅穴式住居址 SK215 2区の15号土壤
3. 平成2年度調査の堤六本谷遺跡3区の遺構について、調査員のミスによって、遺構番号を記した記録を紛失し、調査時に現地で各遺構に付した遺構番号と実際の遺構、遺物の出土遺構との照合ができない事態となつた。当事者の不手際により、貴重な資料を失ったことについて、深く反省し、お詫びいたします。
4. 前記により、堤六本谷遺跡3区の遺構については、仮の遺構番号351～355（調査時の遺構番号とは一致しない）を付して報告することとし、出土遺物については、調査時の遺構番号により遺構ごとに報告することとさせていただきたい。
5. 掘図中の方位について、平成2年度の堤六本谷遺跡調査に係る掘図のうち、既成の地形図などを用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現地で作成した遺構図などは図中方位が磁北を表している。また、屋形原遺跡に係る掘図は、全て座標北を基準としている。
6. 表中の数値に付した記号について、( )は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。
7. 土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
8. 土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。同図中のヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。
9. 遺物実測図の遺物報告番号は、各年度ごとに一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版の遺物報告番号と一致する。

## 調査組織

平成2年度

調査事務局	總括	松田末治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬場英孝	"	教育課長
	経費執行	吉田忠	"	社会教育係長
		鶴田浩二	"	社会教育係
調査組織	調査員	原田大介	"	"
		鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
		原田大介	"	"
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

平成6年度

調査事務局	總括	松田末治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬場英孝	"	教育課長
	経費執行	白瀬博巳	"	社会教育係長
		鶴田浩二	"	社会教育係
		原田大介	"	"
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
		原田大介	"	"
調査指導		佐賀県教育委員会文化財課		

## 発掘作業参加者

平成2年度

秋山 廉、秋山ユキエ、石橋ツタエ、石橋テル、石丸ミチエ、江頭晴次、江口正弘、大坪光代、緒方ツタエ、  
緒方 中、小田鈴江、小田 強、川原ツヤ、川原 等、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、  
古賀敬治、鳴山静江、執行ミハル、高島 昇、田中 巧、田中ミスエ、堤 イシ、堤 一、鶴田久子、  
鶴田八重子、中原百合、中村初一、納富スイ子、福島一雄、古川シマ子、松尾トシエ、三好スエ、矢動丸茂利、  
矢動丸信子、矢動丸ミツエ、柳 和義、山口ミヨ子、和佐治夫(発掘作業員)  
荒木和代、江頭洋子、海良田順子、島 美保子、馬原喜美子、矢動丸五十三(実測作業員)

平成6年度

秋山キミ、秋山ユキエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、稻員シヅ子、稻員トシエ、稻員春雄、稻員博敏、  
岩下貴子、江越栄子、江越 齢、江越清太、江崎秋子、江崎オシノ、大石貞義、大坪光代、大坪ミヨコ、  
緒方ツタエ、小田八重子、川原ツヤ、川原 等、川原ミヨ、後藤セツ子、最所和子、執行一水、島 四郎、  
高尾マツヨ、高島 昇、武廣ハル子、田中ミスエ、鶴田キヨ子、鶴田竹次、鶴田久子、鶴田八重子、豊福政子、  
納富スイ子、福島一雄、福島チヨ子、福島ツタエ、藤井妙子、藤戸道子、松尾キミエ、松尾トシエ、三好スエ、  
矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山下保子、(発掘作業員)

## 整理作業参加者 (過年度の整理作業分を含む)

大隈弓子、岩下貴子、坂本恵子、島 美保子、田尻祐子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子(製図作業員)

# 目 次

## 序

### 例言・凡例

### 調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I. 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 遺跡の位置 .....	1
2. 歴史的環境 .....	1
II. 調査に至る経緯 .....	8
III. 平成2年度堤六本谷遺跡1～3区の調査 .....	11
1. 堤六本谷遺跡と調査区の概要 .....	11
2. 調査の経過 .....	11
3. 堤六本谷遺跡1区の調査 .....	13
(1)遺構 .....	13
(2)遺物 .....	18
4. 堤六本谷遺跡2区の調査 .....	18
(1)遺構 .....	18
(2)遺物 .....	21
5. 堤六本谷遺跡3区の調査 .....	27
(1)遺構 .....	27
(2)遺物 .....	31
6. まとめ .....	32
IV. 平成6年度屋形原遺跡3区の調査 .....	34
1. 屋形原遺跡と調査区の概要 .....	34
2. 調査の経過 .....	34
3. 遺構 .....	36
(1)堅穴式住居址 .....	36
(2)掘立柱建物址 .....	37
(3)土壤 .....	37
(4)溝跡 .....	39
4. 遺物 .....	39
5. まとめ .....	44

# 挿 図 目 次

Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000) .....	2
Fig. 2 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000) .....	3
Fig. 3 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000) .....	12
Fig. 4 堤六本谷遺跡1区 遺構配置図 (1/400) .....	14
Fig. 5 堤六本谷遺跡1区 土壌実測図 (1) SK-101～SK-111 (1/60) .....	16
Fig. 6 堤六本谷遺跡1区 土壌実測図 (2) SK-113～SK-129 (1/60) .....	17
Fig. 7 堤六本谷遺跡1区 出土遺物実測図 (1/4) .....	18

Fig. 8	堤六本谷遺跡2区 遺構配置図 (1/400) .....	19
Fig. 9	堤六本谷遺跡2区 挿立柱建物址実測図SB-220・SB-221 (1/80) .....	20
Fig.10	堤六本谷遺跡2区 土壌実測図SK-203・SK-204・SK-207～SK-213・SK-217 (1/60) .....	22
Fig.11	堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (1) (1/4) .....	24
Fig.12	堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (2) (1/4) .....	25
Fig.13	堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (3) (1/4) .....	26
Fig.14	堤六本谷遺跡3区 積穴式住居址実測図SH-351 (1/80) ・土壤実測図SK-352～SK-355 (1/60) .....	28
Fig.15	堤六本谷遺跡3区 遺構配置図 (1/400) .....	折り込み 29・30
Fig.16	堤六本谷遺跡3区 出土遺物実測図 (1/4) .....	32
Fig.17	屋形原遺跡3区 遺構配置図 (1/500) .....	35
Fig.18	屋形原遺跡3区 積穴式住居址実測図SH-302・SH-310 (1/80) .....	36
Fig.19	屋形原遺跡3区 挿立柱建物址実測図SB-365 (1/80) .....	37
Fig.20	屋形原遺跡3区 土壌実測図SK-301・SK-318～SK-322・SK-326～SK-328・SK-352・SK-353・SK-358 (1/60) .....	38
Fig.21	屋形原遺跡3区 溝跡実測図SD-360 (1/80) .....	40
Fig.22	屋形原遺跡3区 出土遺物実測図 (1) (1/60) .....	41
Fig.23	屋形原遺跡3区 出土遺物実測図 (2) (1/60) .....	42

## 表 目 次

Tab. 1	堤六本谷遺跡1区 出土土壤一覧表 .....	15
2	堤六本谷遺跡2区 出土樹立柱建物址一覧表 .....	21
3	堤六本谷遺跡2区 出土土壤一覧表 .....	21
4	堤六本谷遺跡3区 出土土壤一覧表 .....	31
5	屋形原遺跡3区 出土土壤一覧表 .....	37
6	屋形原遺跡3区 出土石器等一覧表 .....	43
報告書抄録 .....	卷末	

## 図 版 目 次

巻頭図版	PL. 8 堤六本谷遺跡2区 遺物 (1)	
PL. 1	9 堤六本谷遺跡2区 遺物 (2)	
2	10 堤六本谷遺跡2区 遺物 (3)	
3	11 堤六本谷遺跡3区 遺構集中部・遺物	
4	12 屋形原遺跡3区 遺構 (1)	
5	13 屋形原遺跡3区 遺構 (2)	
6	14 屋形原遺跡3区 遺構 (3) ・遺物 (1)	
7	15 屋形原遺跡3区 遺物 (2)	
図版		

# I. 遺跡の位置と環境

## 1. 遺跡の位置 (Fig. 1・2)

堤六本谷遺跡および屋形原遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開拓され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った堤六本谷遺跡および屋形原遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓を源とする切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の開拓作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には、大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成2年度の県営農業基盤整備事業に伴い調査を実施した堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷、一本柳に所在し、切通側東岸の標高24m~40m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山南麓から南西へ派生する丘陵（以下、青柳丘陵と呼称する。）で、東方の八藤遺跡、新立古墳群が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大鳥井川によって、西方の屋形原遺跡が立地する丘陵（以下、屋形原丘陵と呼称する。）とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。この丘陵高位段丘面には青柳古墳群が立地しており、丘陵周辺部の低位段丘面に本遺跡は広がっている。

一方、平成6年度の県営農業基盤整備事業に伴い調査を実施した屋形原遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本松に所在し、切通川西岸の標高25m~27m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する屋形原丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する丘陵で、東方の堤六本谷遺跡、青柳古墳群が立地する青柳丘陵とは切通川本流によって、西南方の二塚山遺跡群が立地する二塚山丘陵とは切通川支流の屋形原川によってそれぞれ分かたれている。この丘陵高位段丘面には屋形原古墳群などが立地しており、丘陵先端部の低位段丘面に本遺跡は広がっている。

## 2. 歴史的環境 (Fig. 2)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部および各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においてもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を繩文時代以前の遺跡と比較すると、量

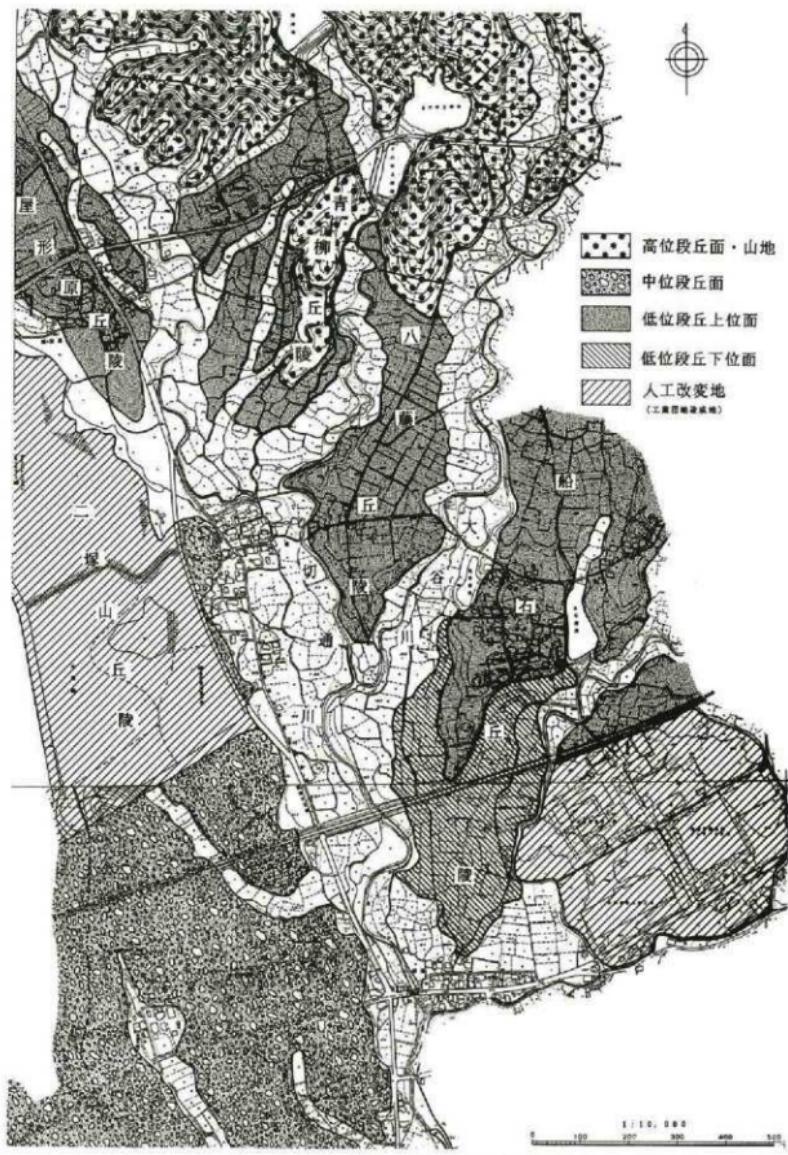
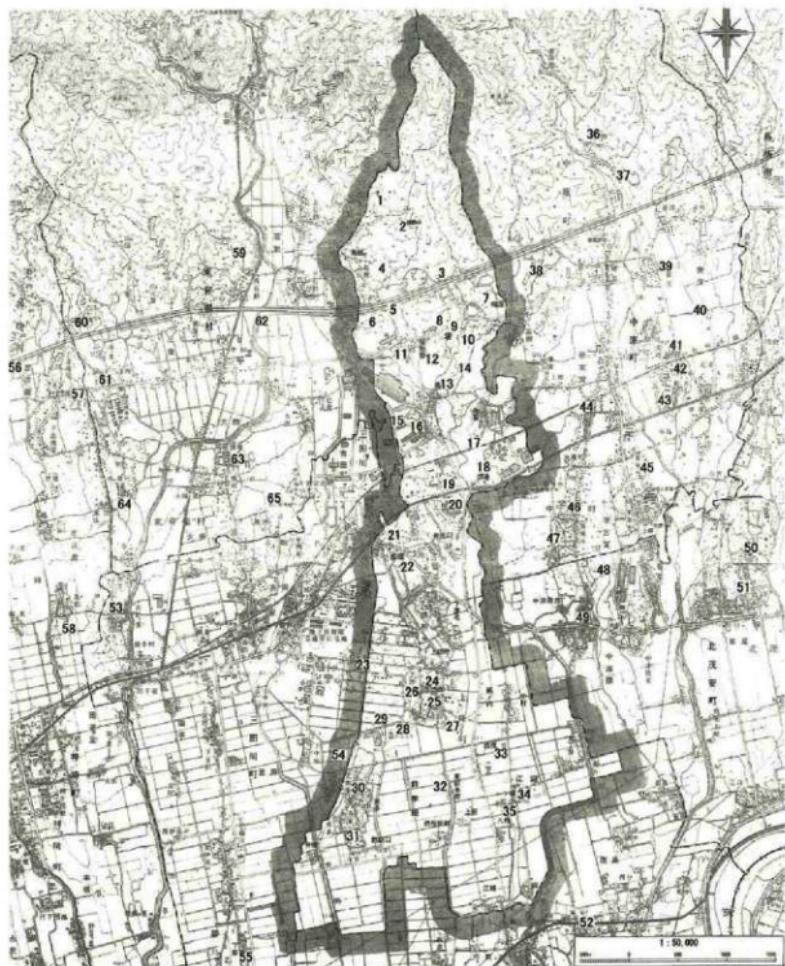


Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)



上野町	堤六谷遺跡	市原町	神崎町
1 虎の塚古墳群	12 堤六谷宿跡	24 清所城跡	47 西寒水遺跡
2 銀山山古墳	13 墓土尼跡	26 佐伊鹿跡	56 木造第六本松遺跡
3 二本柳古墳群	14 八郎遺跡	26 寺中鬼鹿跡	57 伊勢原前方後円墳
4 鎮西山兩面古墳群	15 二坪山遺跡	27 猿舟二本松遺跡	58 伊那郡遺跡
5 鶴三本松遺跡	16 五本谷遺跡	28 猿舟三本松遺跡	59 東石動古墳群
6 忍足原古墳群	17 船石遺跡	29 滝の原鹿寺跡	60 大坪古墳
7 台瀬古墳群	18 船石南遺跡	30 上木多貝塚	61 東尾嗣村出土遺跡
8 鳥三本柳遺跡	19 朝通遺跡	31 米多越跡	62 西石動古墳群
9 香椎古墳群	20 一本谷遺跡	32 前寺松根跡	63 三津余田遺跡
10 新立古墳群	21 劍削一本谷遺跡	33 加茂堆草塚跡	64 遠石動古墳跡
11 麗比原遺跡	22 上のひまう堆古墳	34 江口遺跡	65 中村丘陵遺跡群
	23 田邊原古墳群	35 ノ橋原振築跡	66 幸上御寺跡
		46 天津遺跡	67 桥田遺跡

Fig. 2 堤六谷遺跡・星形原遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)

的にも、質的に爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋲型を出土した鳥栖市安永田遺跡<sup>11</sup>、約400基の要棺墓が検出された中原町姫方遺跡<sup>12</sup>、12本の鋼矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡<sup>13</sup>、要棺墓から船載鏡を出土した神埼郡東脅振村三津永田遺跡<sup>14</sup>、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な造構、遺物が検出された神埼郡三田川町・神埼・東脅振の2町1村にまたがる吉野ヶ里遺跡<sup>15</sup>など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石墨類が少量出土しているが<sup>16</sup>、これが発掘調査における主な出土例である<sup>17</sup>。周辺地域では、神埼郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている<sup>18</sup>。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇4火砂流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において造構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近でアカホヤ含有層のや下部にて検出されている<sup>19</sup>。

縄文になると、中原町番田遺跡<sup>20</sup>や東脅振村戦場ヶ谷遺跡<sup>21</sup>などが出現する。町内においても、これまでにも町北部の丘陵部から土器や石器が<sup>22</sup>、耕作や先覺者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていて、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区<sup>23</sup>、平成2年度から年度にわたり実施した八藤丘陵の調査<sup>24</sup>において、造構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴國」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三義基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の堤地区周辺では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、要棺墓から纏形刺刀や貝鏡を出土した初通遺跡<sup>25</sup>、神埼郡東脅振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い要棺墓、土壤墓など約300基が調査され、船載鏡、小型仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡<sup>26</sup>、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡<sup>27</sup>、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の要棺墓が検出された船石遺跡<sup>28</sup>などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡<sup>29</sup>、船石南遺跡<sup>30</sup>、八藤遺跡<sup>31</sup>から住居址や要棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡<sup>32</sup>、上峰町五本谷遺跡<sup>33</sup>などにおいて方形周溝墓が營まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳<sup>34</sup>、中原町姫方古墳<sup>35</sup>、上峰町西南部から神埼郡三田川町にまたがる目

達原古墳群<sup>24)</sup>、神埼郡神崎町伊勢塚古墳<sup>25)</sup>、佐賀市銚子塚古墳<sup>26)</sup>、佐賀郡大和町船塚古墳<sup>27)</sup>など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保一鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多數築かれ、それぞれか山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の「肥前風土記」にみえる三根鹿綾部・米多郷に属する当時の上峰町一帯は、「古事記」、「国造本紀」などの記事によれば応神天皇の曾孫にあたる「御紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神埼郡三田川町東部の自蓮原一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、御紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「御紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、種荷塚などの前方後円墳6基ほか古稻荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群<sup>28)</sup>が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄劍、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳<sup>29)</sup>が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の頬西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神埼郡三田川町下中枕遺跡<sup>30)</sup>、同郡東脅振村下石動遺跡<sup>31)</sup>などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいまに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中枕遺跡、東脅振村辛上魔寺跡<sup>32)</sup>、雲仙寺跡<sup>33)</sup>などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡<sup>34)</sup>や塔の塚庵寺跡<sup>35)</sup>などが奈良時代の遺跡として戰前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設=「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土里の東方に接する八藤丘陵の調査において、土里東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され<sup>36)</sup>、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚庵寺跡は、百済系單弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や町内の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡<sup>37)</sup>の調査などでまとった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には埋立平城や集落が出現する。町内の中世館跡としては、北部の頬西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた<sup>38)</sup>。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななか

で、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡とともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している<sup>39)</sup>。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

## 註

- 1) 藤瀬徳博・石橋新次 「袖比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」 烏柄市文化財調査報告書第30集  
　鳥柄市教育委員会 1980
- 2) 木下巧・天本洋一「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭「検見谷遺跡」北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 4) 金闇丈夫・坪井清足・金闇惣「佐賀県三津永田遺跡」「日本農耕文化の生成」日本考古学協会 1961
- 5) 七田忠昭他「吉野ヶ里」佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
- 6) 原田大介「八藤遺跡Ⅲ」上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 7) 七田忠志「原始」「上峰村史」上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄「II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」「佐賀平野の陶器4火碎流と埋没林」上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」「香田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2  
　佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志「佐賀県戦場ケ谷遺跡」「史前学雑誌」6-2・4 1934
- 11) 原田大介「船石遺跡V」上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 原田大介「八藤遺跡II・堤土里跡II」上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998  
前出(6)
- 13) 金闇丈夫・金闇惣・原口正三「佐賀県切通遺跡」「日本農耕文化の生成」日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会  
1979
- 15) 七田忠昭「一本谷遺跡」上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 16) 七田忠昭「船石遺跡」上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II 図録編」上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988  
　鶴田浩二・原田大介「船石遺跡II本文編」上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 18) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 19) 原田大介「八藤遺跡I」上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
- 20) 木下巧他「姫方原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 21) 木下巧・七田忠昭「五本谷遺跡」「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 22) 石橋新次「劍塚前方後円墳」烏柄市文化財調査報告書第22集 烏柄市教育委員会 1984
- 23) 前出(2)
- 24) 松尾徳作「目達原古墳群調査報告」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」第9輯 佐賀県教育委員会  
1950

- 25) 木下之治「古代国家の形成」「佐賀県史」佐賀県 1968
- 26) 木下之治編『銚子塚』佐賀市教育委員会1976
- 27) 松尾慎作『佐賀県考古大観』祐徳博物館 1959
- 28) 前出（24）
- 29) 前出（16）
- 30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己「下中杖遺跡」佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 31) 高瀬哲郎他「下石動遺跡」「下石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 32) 松尾慎作「東脊振村辛上磨寺跡の調査」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」第5輯 佐賀県 1936
- 33) 田平徳栄他『寶仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 34) 高島忠平・極一義『堤土里跡』上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 35) 松尾慎作「塔の塚庵寺址」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」第7輯 佐賀県 1940
- 36) 前出（12）  
原田大介『八藤遺跡Ⅲ』上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 38) 米倉二郎「中世」「上峰村史」上峰村 1979
- 39) 原田大介『坊所城跡』上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

## II. 調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連續として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となつた。この農家経済の行き詰まりを開拓するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。

佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の駒地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以降、町の中央部を東西に横断する国道34号線以南の沖積平野に広がる町南部の圃場を対象に昭和58年度まで事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の1戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な変更を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日の要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となつた。この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」(昭和53年4月締結、昭和59年4月一部改正。)という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる埋蔵文化財発掘調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われてきた。

この調整は、「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」にて実施されており、具体的には、例年以下の手続きを踏んでいる。

### (1) 「第1回協議会」(毎年10月中旬)

次年度の農業基盤整備事業実施計画が提示され、当該区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、埋蔵文化財確認調査の要不要を確認する。

### (2) 確認調査 (10月中旬～12月上旬)

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区内について遺構の有無・密度・内容、遺構面までの表度の深度等を把握する。

### (3) 「第2回協議会」(毎年12月中旬)

確認調査の結果を基に、事業計画の設計変更など本調査面積の縮小につとめ、必要最小限の部分を次年度埋蔵文化財本調査区域とする。

上峰町における上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年9月に、県農業基盤整備事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、国道34号線以北、JR長崎本線以南の耕地について農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて協議をもつたことに始まる。以後、毎年この協議を経て農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保護との調整を行っている。

今回報告する堤六本谷遺跡・屋形原遺跡を含む地域について協議がもたれたのは、屋形原遺跡が昭和63年度、堤六本谷遺跡が平成元年度のことであった。

#### 屋形原遺跡

昭和63年10月18日、「昭和64年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第1回協議会」が開催された。その席上、昭和64年度農業基盤整備事業として、大字堤屋形原地区一帯の事業計画が提示された。当時屋形原遺跡は集落が立地する段丘高位面のみが埋蔵文化財包蔵地として周知されていたが、事業計画区域は、県道富士・中原停車場線以西の屋形原集落南部の段丘高位面から低位面にかけての水田一帯を包含しており、事業計画区域内について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の田面、耕地約3haを対象に、畠割り終了をまって実施した。調査は、2m×2mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝10ヵ所による調査で弥生時代や奈良時代の住居址が検出され、約7,500m<sup>2</sup>におよぶ遺跡の広がりが確認された。前述のようにそれまでは、現屋形原集落部分のみが周知の埋蔵文化財包蔵地として県遺跡地図に登録されていたが、周知の埋蔵文化財包蔵地外であった南部の田面下にも遺構が検出され、段丘全体が屋形原遺跡として登録されることとなった。

昭和63年12月20日、確認調査の結果に基づいて「第2回協議会」が開催された。本席上では、確認調査で新たに検出された約7,500m<sup>2</sup>に及ぶ遺跡の取扱いについて協議をもったが、農業基盤整備事業の実施設計が終了しておらず、設計変更等による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整は果たせなかった。その後個別の協議を重ねたものの、最終的に、事業予定地区内の屋形原遺跡7,500m<sup>2</sup>全体について、昭和64年度（平成元年度）事業として、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

しかし、平成元年4月の時点で、農業基盤整備事業について県農林部と地元農家との調整がつかず、屋形原地区的農業基盤整備事業そのものが先送りとなつたため、事業計画が具体化した時点で、工事の設計変更等も含めて再度協議を行うこととなった。その後上峰北部農業基盤整備事業は平成元年度から平成5年度まで堤地区について事業が実施され、屋形原地区的農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いが再度協議の場に上がつたのは平成5年10月の「平成6年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第1回協議会」であった。実施設計の結果、7,500m<sup>2</sup>のうち5,000m<sup>2</sup>について工事の影響が及ぶことが確認され、さらにその5,000m<sup>2</sup>のうちの1,750m<sup>2</sup>について平成6年度の国庫補助事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

#### 堤六本谷遺跡

平成元年10月17日、「平成2年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第1回協議会」が開催された。その席上、平成2年度農業基盤整備事業として、堤地区北部一帯の事業計画が提示された。事業計画区域は、西は県道富士・中原停車場線以東の堤集落北部一帯から、東は中原町との境界までの広大な区域にわたり、当時周知の埋蔵文化財包蔵地外であった字迎原地区の八幡丘陵も含まれていた。協議の結果、堤地区一帯におよぶ事業計画区域内について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の町道堤・船石線の北部一帯の田面、耕地を対象に、種刈り終了をまって実施した。調査は、2m×2mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝136ヵ所による調査で約40,000m<sup>2</sup>におよぶ遺跡の広がりを確認した。確認調査の結果、鎮西山山麓から県道佐賀川久保鳥栖線の南へ舌状に延び、高位段丘面には青柳古墳群が立地する青柳丘陵の先端部において約20,000m<sup>2</sup>に及ぶ弥生時代、奈良時代の遺跡の広がりが確認され、堤六本谷遺跡として新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されることになった。

平成元年12月26日、確認調査の結果に基づいて「第2回協議会」が開催された。本席上では、確認調査で検出された約40,000m<sup>2</sup>に及ぶ遺跡の取扱いについて協議が行われ、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その後個別協議を繰り返し、最終的に、堤集落北方に位置し堤土塁跡の後背地にあたる堤六本谷遺跡のうち、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲5,200m<sup>2</sup>について、事前の記録保存を目的とし、平成2年度の国庫補助事業として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

### III. 平成2年度堤六本谷遺跡1~3区の調査

#### 1. 堤六本谷遺跡と調査区の概要 (Fig. 1, 3 · PL. 1~3)

堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、六本谷の「青柳丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m~35m付近）に位置している。青柳丘陵は、鎮西山南麓から派生し、九州自動車道を横断し、さらには県道佐賀川久保鳥居線の南へと舌状に延びる丘陵となっており、東方の八幡丘陵、西方の屋形原丘陵とは、それぞれ、東は切通川支流の大島居川、西は切通川本流によって分かれている。

本丘陵上には、県道以南の高位段丘（標高30m~45m付近）上に小円墳が点在しており、青柳古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたものの、高位段丘面の周辺に広がる低位段丘上位面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成元年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘部分において弥生時代、奈良時代、近世の構造・遺物が検出され、全体で20,000m<sup>2</sup>ほどの集落遺跡が所在していることが判明し、堤六本谷遺跡の名称で新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなつた。また同時に、本遺跡の南方約200m付近には、東の八幡丘陵と西の二塚山丘陵の間の谷部を東西に遮断する形で堤土壁が築かれており、遺跡がこの後背地にあたることから、堤土壁の築造目的解明につながるような遺構の存在も期待された。

遺跡が立地する大字堤字一本柳、六本谷地区の青柳丘陵先端部にあたる低位段丘上位面は、前述のように高位段丘面の周辺に発達しているが、小水路によって開削された小谷によりいくつかの支丘に分かれヤツデの葉状を呈している。現在は、主に水田として利用されている。

堤六本谷遺跡のうち、平成2年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字六本谷地区、現堤集落北方一帯の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予想される3支丘、合計5,200m<sup>2</sup>部分について、西から支丘ごとに1~3区の調査区に分けて調査を実施した。各調査区の位置および面積は、最も西に位置する調査区1区が<sup>1</sup>、堤集落の北方約300m、切通川の東方約50m付近の1,240m<sup>2</sup>、2区は、1区から50mの谷部を挟んで東方約710m<sup>2</sup>、3区は、2区のさらに東方約100m付近3,250m<sup>2</sup>となっている。

今回の調査では、1~3区全域にまたがる部分に磁北を基準とする10m×10mグリッドを設定した。グリッドは、1区が<sup>1</sup>、南北列北から1~7の7列、東西列東からA~Eの5列を、2区が<sup>1</sup>、南北列北から1~7の7列、東西列東からA~Dの4列を、3区が<sup>1</sup>、南北列北から9~16の8列、東西列東からH~Uの14列を、それぞれ設定し調査を実施した。

調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは水田底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤六本谷遺跡の今回の調査では、1区で、弥生時代後期及び奈良時代の土壤、その他ピットなどが検出された。2区で、弥生時代の土壤のほか、中世の土壤、時期不明の獨立柱建物址などが検出された。3区では弥生時代後期及び奈良時代の土壤などの他、多數の柱穴と考えられるピット群がK~O列、11~13Gr.付近の一帯高い部分で集中して検出されている。

#### 2. 調査の経過

平成2年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、開場基盤造成工事により面的に削平が予定される

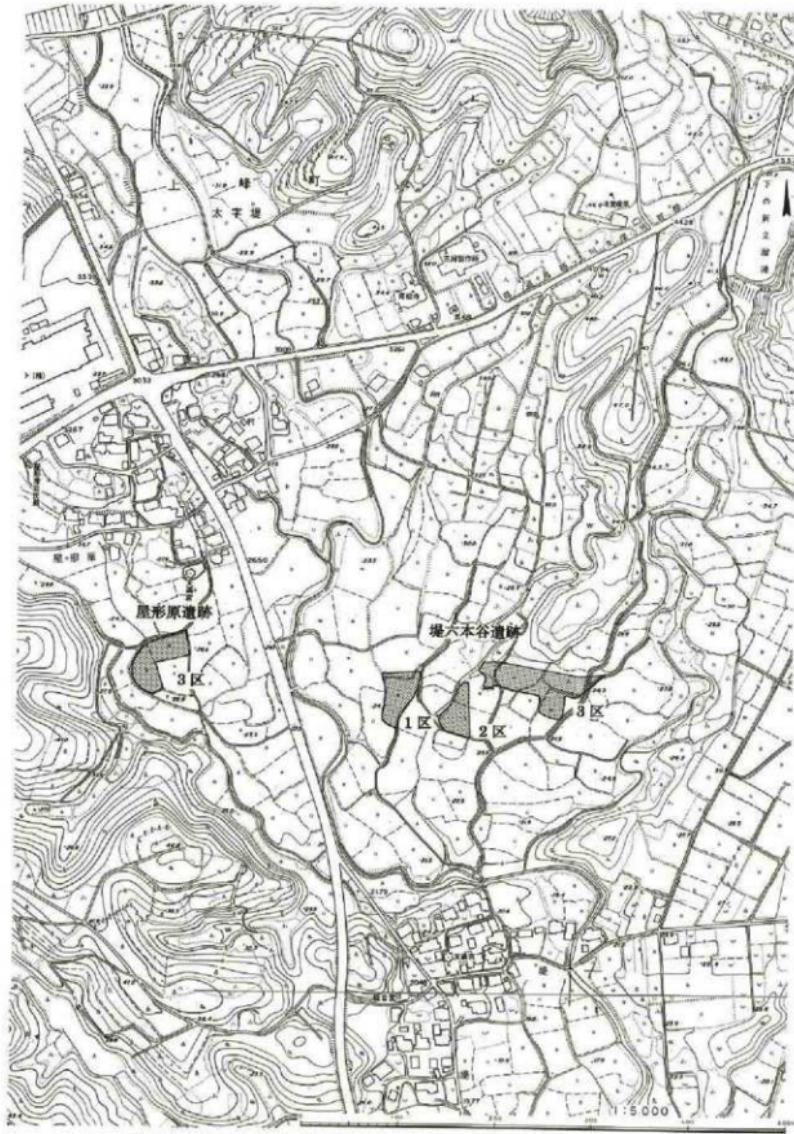


Fig. 3 堤六本谷遺跡・屋形原遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)

部分5,200m<sup>2</sup>を便宜的に1区～3区の3区域に分割し、実施した。調査は平成2年6月に着手し翌平成3年3月26日まで作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

6月8日、堤六本谷遺跡1区について、重機による表土剥ぎを開始した。

6月21日、1区の表土剥ぎ終了後、引き続き2区の表土剥ぎに着手する一方で、作業員が集合し、現地にて簡単な発掘調査の安全祈願を行った後、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営などを行い、午後から1区の北部より、作業員の人力による遺構検出作業を開始した。

以後、調査区に設定した10m×10mのグリッドごとに遺構検出作業を行い、検出された遺構については逐次掘下げを行い、必要に応じて遺構の写真撮影を行った。調査期間の前半は梅雨の時期で調査は進捗しなかったが、梅雨明けの7月後半からは天候にも恵まれ、調査の範囲を調査区南部へと広げていった。1区の遺構検出・掘り下げ作業は、8月2日に終了した。

出土遺物の取上げ作業、遺構の実測作業は、調査員の指示により製図作業員によって、掘下げ作業が終了した8月2日から実施し、8月22日に1区の一応の調査を終了した。

2区の調査は、6月18日から重機による表土剥ぎに着手、6月21日終了。

7月25日、調査区に測量杭打設。8月6日、北部から遺構検出作業に着手、1区と同様手順での作業を調査区南部へと進めていった。

8月11日より15日までお盆休み。

9月5日、2区の遺構掘下げ作業を終了した。

3区の調査は、10月1日、調査区北西部から重機による表土剥ぎに着手。11月5日終了。

12月12日、1区、2区の気球による空中写真撮影を業者に委託し、撮影終了後、2区の実測作業に着手するとともに、3区の作業員による遺構検出、掘下げ作業開始。

12月21日、2区の実測作業を終了。

一方、3区では調査区の西半部は近世の遺構が散見される程度であったが、東半部分の一段高い田面跡では弥生時代後期の土壙や奈良時代の土壙の他に、K～O列、11～13Gr.付近では、建物の柱穴と考えられる無数のピットが検出された。このピット群の中には、建物を構成する柱穴も數多く含まれていることは推測できたが、あまりにも数が多く個々の建物を特定できなかった。

12月28日より平成3年1月6日まで作業休止。

3区の遺構実測については、業務を専門業者に委託することとしていたが、前述のように多数のピット群が検出されたこと受けて、写真測量を行うこととし、発掘作業が終了した2月13日、図化のための写真撮影を行い、3月7日、19日の両日、3区の気球による空中写真撮影を業者に委託し現地での作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末の3月26日まで、遺物の水洗い、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成2年度の作業を終了した。

### 3. 堤六本谷遺跡1区の調査

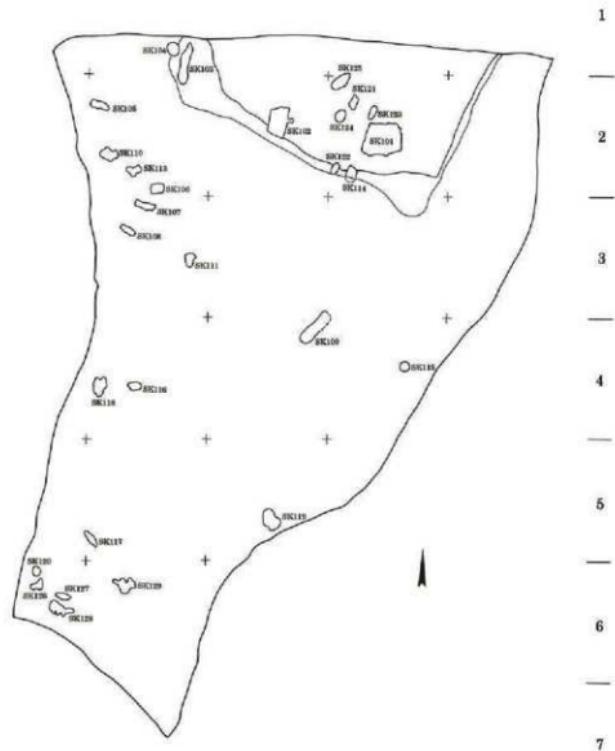
#### (1) 遺構 (Fig. 4～6・PL. 1、5、6・Tab. 1、2)

1区の調査で検出された遺構は、土壙28基であった。

#### 土壙 (Fig. 5、6・PL. 5、6・Tab. 1)

検出された28基の土壙の中で時期が特定できるものは、層台と甕を出土したSK-104のみが弥生時代後期の所

E | D | C | B | A |



0 20m

Fig. 4 堤六本谷遺跡1区 遺構配置図 (1/400)

産と考えられ、他の27基については、遺物も持たないものも多く、なかには、奈良期の様相を呈す土師器や須恵器などの遺物をもつものも見られるが、いずれも図示できないような小片であった。

Tab. 1 六本谷遺跡I区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規格（上段：上面、下段：底面、単位：m・mm）			柱穴状の ピットなど	出土 遺 物	備 考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積		
SK-101	不整形	3.20 2.97	2.65 2.46	0.40	6.2		
SK-102	不整形	(2.9) (2.7)	1.54 1.42	0.22	(3.3)		
SK-103	不整形	3.55 3.42	0.87 0.72	0.25	1.6		
SK-104	不整円形	1.22 1.17	{(0.9) (0.8)}	0.18	0.8	弥生式土器窓・縁台	
SK-105	不整形	1.70 1.40	0.63 0.37	0.54	0.3		
SK-106	不整方形	1.08 0.98	0.80 0.56	0.59	0.5		
SK-107	不整形	1.87 1.63	0.58 0.52	0.55	0.6		
SK-108	不整形	1.35 1.16	0.62 0.52	0.63	0.5		
SK-109	隅丸長方形	(3.3) (3.0)	0.95 0.82	0.27	(2.3)		
SK-110	不整形	1.32 1.16	0.87 0.70	0.27	0.7		
SK-111	不整橢円形	1.13 1.02	0.65 0.54	0.46	0.5		
SK-113	不整形	1.06 0.96	0.88 0.74	0.31	0.4		
SK-114	不整方形	※1.0 ※0.9	0.80 0.70	0.29	※0.5		
SK-115	円形	0.85 0.75	0.76 0.64	0.32	0.4		
SK-116	不整方形	1.10 1.04	0.67 0.59	0.28	0.5		
SK-117	不整形	1.86 1.74	0.52 0.38	0.28	0.4		
SK-118	不整方形	1.40 1.30	1.30 1.24	0.53	1.2		
SK-119	不整方形	※1.8 1.36	1.10 0.94	0.12	1.0		
SK-120	不整円形	0.86 0.74	0.64 0.46	0.32	0.2		
SK-121	不整方形	1.00 0.88	0.70 0.53	0.40	0.4		
SK-122	不整橢円形	0.94 0.84	0.54 0.44	0.56	0.3		
SK-123	不整橢円形	1.20 0.70	0.52 0.33	0.18	0.2		
SK-124	不整方形	0.91 0.74	0.76 0.56	0.47	0.4		
SK-125	不整形	1.90 1.78	0.84 0.74	0.07	1.0		
SK-126	不整形	1.12 1.02	0.78 0.62	0.28	0.4		
SK-127	不整形	1.34 1.16	0.50 0.28	0.46	0.3		
SK-128	不整形	2.12 2.02	0.94 0.88	0.24	1.0		
SK-129	不整形	1.54 1.30	1.22 0.70	0.58	0.6		

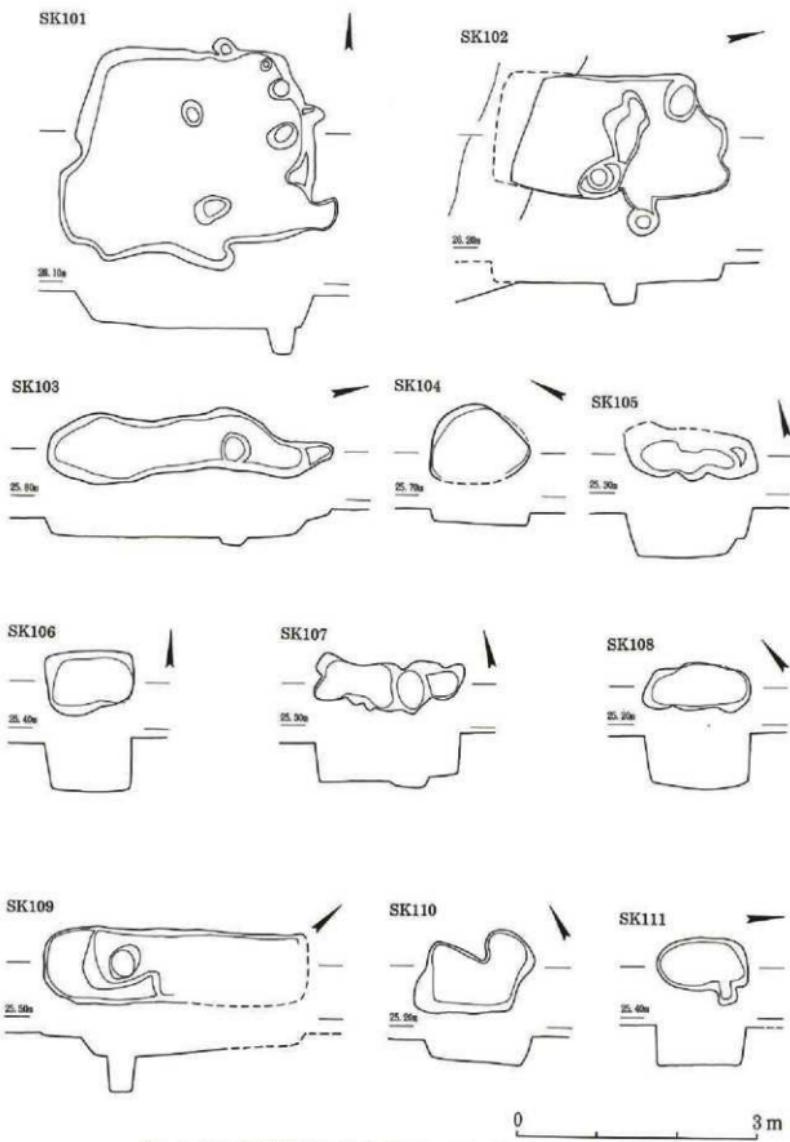


Fig. 5 堤六本谷遺跡1区 土壙実測図 (1) SK-101~SK-111 (1/60)

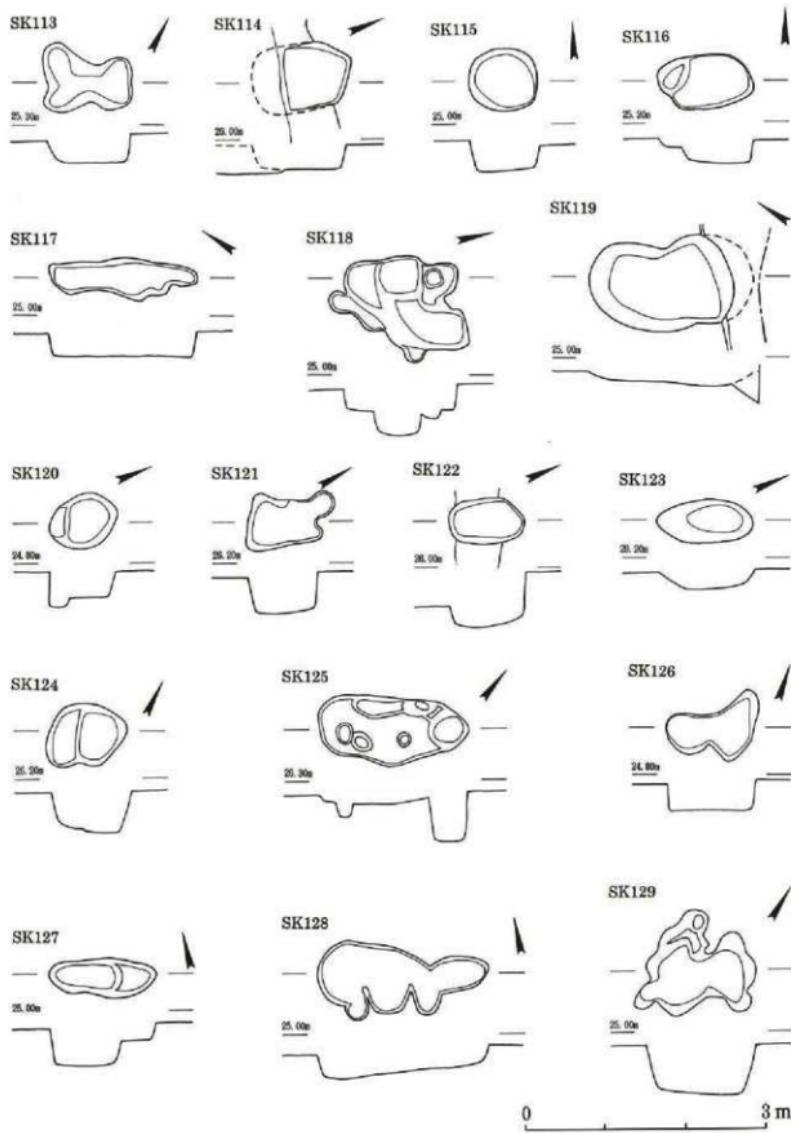


Fig. 6 堤六本谷遺跡1区 土壤実測図 (2) SK-113～SK-129 (1/60)

## (2)遺物 (Fig. 7)

1区の調査で遺構から出土した遺物は、前述のように少量で、そのほとんどが図示に耐えないような奈良期の土解器・須恵器の小片であった。ここでは、僅かに図示できる弥生時代中期の土壙SK-104出土遺物について報告する。

## SK-104出土土器 (Fig. 7)

1・2は、弥生式土器。1は、器台で直線的に広がる受け部の1部が遺存している。受け部の内面はやや内湾し、内面横位のハケ目、外面縦位のハケ目。2は、胴部中位に最大形をもつやや長脚の甕と思われ、口縁部はやや外反しながら逆L字型に大きく開く。

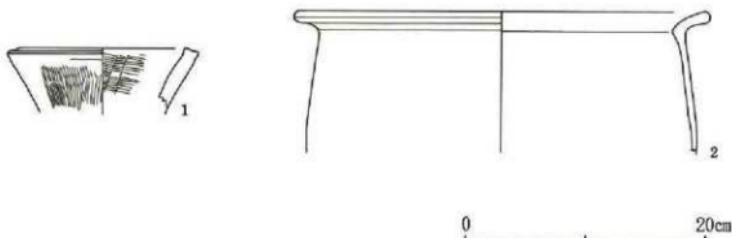


Fig. 7 堤六本谷遺跡1区 出土遺物実測図 (1/4)

## 4. 堤六本谷遺跡2区の調査

### (1)遺構 (Fig. 8~10・PL. 2、7・Tab. 2、3)

2区の調査で検出された遺構は、時期不明の掘立柱建物址2棟、中世の土壙8基であった

### 掘立柱建物址 (Fig. 9・PL. 2・Tab. 2)

2区の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-220、SB-221の2棟であった。いずれも柱穴などからの出土遺物は皆無で、時期は特定しがたい。

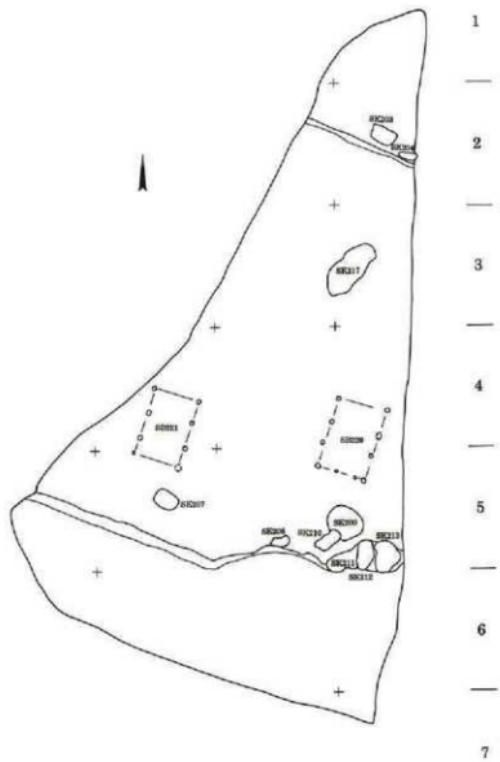
### SB-220 (Fig. 9・PL. 2)

SB-220は、A-4、5Grで検出された3間×1間の掘立柱建物址で、入口施設に付随するものか、建物の南辺の東に偏った位置に直径約20cmと同約25cmの小柱穴が約1.7mの間隔で穿たれている。主柱穴は、直径50cm～70cm、深さ35cm～50cm程度の円形の掘り方。桁行の柱間は平均1.9m、梁行の柱間は2.7m。規模は桁行5.6m、梁行4.2m、床面積23.5m<sup>2</sup>。主軸は、N-18°-Eである。

### SB-221 (Fig. 9・PL. 2)

SB-221は、C-4、5Grで検出された3間×1間の掘立柱建物址で、東南隅の柱穴を失っている。柱穴は直径

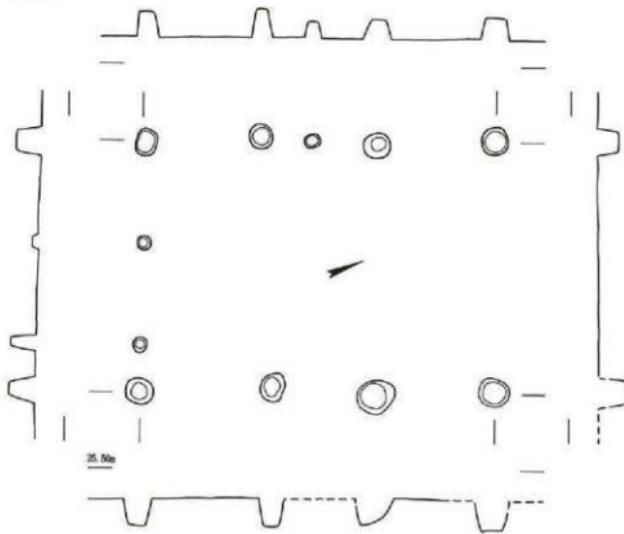
D | C | B | A | —



0 20m

Fig. 8 堤六本谷遺跡2区 遺構配置図 (1/400)

SB220



SB221

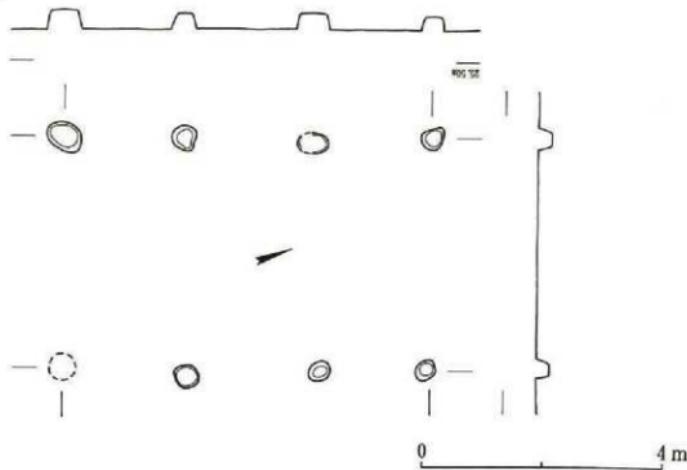


Fig. 9 堤六本谷遺跡2区 掘立柱建物址実測図SB-220・SB-221 (1/80)

30cm～60cm、深さ25cm～35cm程度の円形の掘り方。桁行の柱間は平均2.1m、梁行の柱間は3.8m。規模は桁行6.0m、梁行3.8m、床面積22.8m<sup>2</sup>。主軸は、N-20°-Eである。

Tab.2 堤六本谷遺跡2区 出土掘立柱建物址一覧表

遺構番号	平面形態	規格 (単位:m・m)				棟方向	備考
		桁行柱間	梁行柱間	長さ×幅	床面積		
B-220	3×1	1.9	4.2	5.6×4.2	23.5	N-18°-E	
SB-221	3×1	2.1	3.8	6.0×3.8	22.8	N-20°-E	

土壤 (Fig. 10・PL. 7・Tab. 3)

2区の調査で土壤として取り扱った貯蔵穴などの遺構は10基であった。この中で時期が特定できる土壤は、中世の土鍋などを出土したSK-203、SK-204、SK-207、SK-209、SK-211、SK-213等が中世の所産と考えられ、他の4基については、遺物も持たないものも多く、時期を特定するまでには至らなかった。

Tab.3 堤六本谷遺跡2区 出土土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規格 (上段:上面、下段:底面、単位:m・m)				柱穴状のビットなど	出土 遺物	備考
		長さ・直径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-203	不整形方	2.28 2.12	1.40 1.23	0.50	2.2		中世土器土鍋	
SK-204	不整 長椭円形	※1.5 1.00	0.66 0.42	0.29	0.4		近世甕・磁器皿	
SK-207	不整椭円形	2.12 1.94	1.57 1.44	0.13	2.4		中世土器土鍋	
SK-208	不整形	(1.6) 1.52	0.93 0.74	0.12	0.9			
SK-209	不整円形	2.68 2.02	(2.6) (2.1)	0.82	(2.8)		中世土器甕・擂鉢・陶器皿	
SK-210	不整形方	※1.6 ※1.4	1.10 0.82	0.16	※1.0			
SK-211	不整形	※6.3 ※6.2	2.38 1.80	0.57	※9.0		中世土器土鍋・甕・壺・陶器皿他	叩き石 土製人形
SK-212	不整椭円形?	2.08 1.84	※1.3 0.98	0.65	1.7			
SK-213	不整 長椭円形	2.40 2.24	※1.9 1.16	0.66	2.4		中世土器土鍋・甕・壺・皿	石斧
SK-217	不整形	5.10 2.45	2.16 0.96	0.20	1.1			

(2)遺物 (Fig. 11～13・PL. 8～10)

2区の調査で遺構から出土した遺物は、少量で、ほとんどが中世から近世の所産になるものであった。ここでは、図示できる遺物のうち、土器類・土製品については代表的なものを遺構ごとに報告し、その他の石器類は、器種ごとに報告したい。

SK-203出土土器 (Fig. 11)

1は、中世土器の土鍋。やや深めの体部に「く」の字形に内傾する口縁が作り出されている。口縁外面や内面には粗いナデ調整痕が残る。

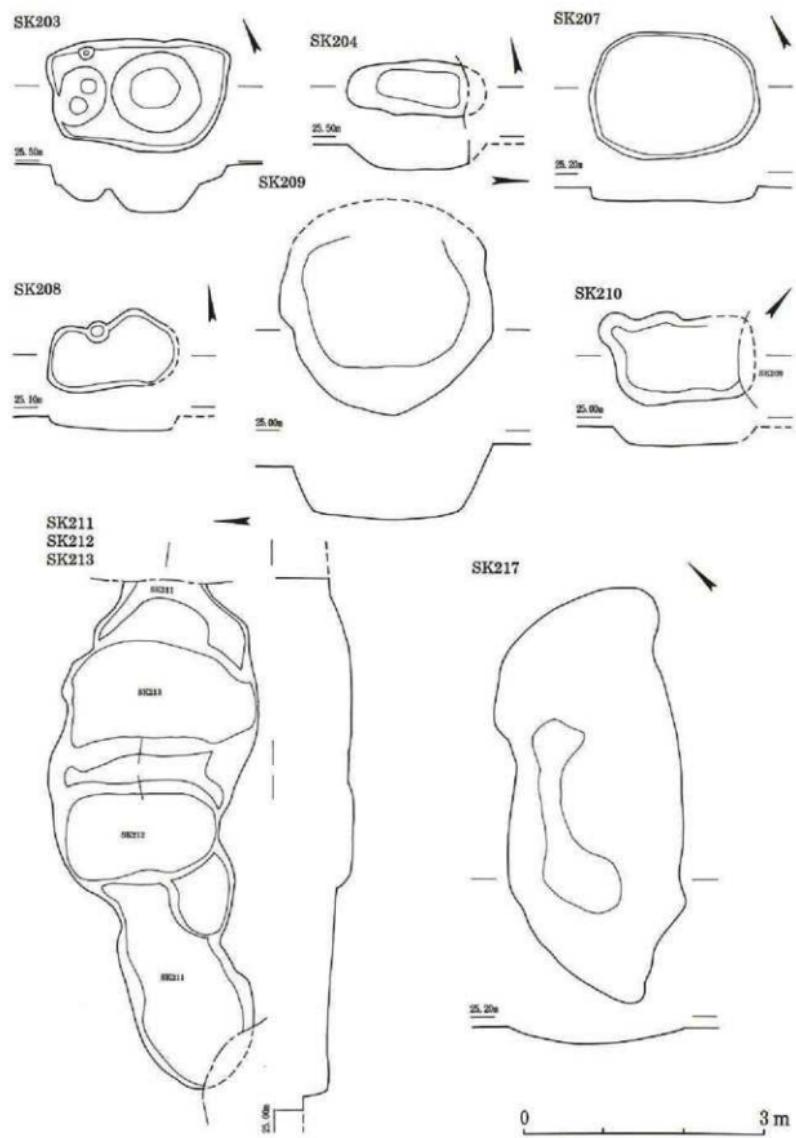


Fig. 10 堤六本谷遺跡2区 土壌実測図 SK-203・SK-204・SK-207～SK-213・SK-217 (1/60)

#### SK-204出土土器 (Fig. 11)

2は、近世の素焼きの甕で、やや胴張りの体部をもつ。3は、18世紀後半代の肥前系磁器染付けの皿。

#### SK-207出土土器 (Fig. 11)

4は、中世土器の土鍋。丸味をもつ体部でやや胴張りの体部をもつ。内外面ともにハケ目。

#### SK-209出土土器 (Fig. 11)

5～8は、いずれも中世土器。5は、朝顔状に聞く体部の土鍋で、口縁部内面に面取りすることで口縁を作り出している。内面ハケ目、外面粗いナデ。6は、瓦質で体部がやや外傾しながら聞く深めの土鍋で、内外面ともにハケ目。7は、胴部上位に最大径をもつ瓦質の甕。口縁は短く直立する。口縁部外面に縱位のハケ目。胴部は内外面ともにハケ目。8は、素焼きの擂鉢。底部は平底で、体部は外傾しながら聞き、口縁外面がやや肥厚する。外面はナデ、内面には縱の掘り目が施されているがほとんど摩滅している。9は、唐津系の陶器の皿。胎土は、緻密で灰色を呈す。高台脇と疊付を除き深緑色の透明釉が施釉されており、細かい貫入が入る。

#### SK-211出土土器 (Fig. 11～13・PL. 8、9)

10～15は、中世土器の土鍋。10は、深い体部に内傾しながら外反する短い口縁がつく外耳土鍋で、径0.8cm程の把手を付けるための穴が穿たれている。内外面ともにハケ目。直接火にかけたものか体部外面下部には煤が付着している。11～13は、口縁部の断面がコの字型を呈す素口縁の瓦質の土鍋。11は、体部が大きく聞く浅めの土鍋で、内面ハケ目、外面ハケ目の後粗いナデ。12は、広く浅い丸底の土鍋で、底部外面は粗いナデ、体部外面と底部内面にハケ目。13は、平底の土鍋で、内面ハケ目、外面ハケ目の後粗いナデ。14、15は、いずれも内外面ともにナデ。14は、体部外面に煤が付着している。16～18は中世土器の擂鉢。いずれも内面横位のハケ目を施した後、縱位に掘り目を施す。16、18は、瓦質土器。16、17は、口縁の一部を外へつまみ出すことによって、注ぎ口を作り出している。19は、瓦質の広口壺。胴部上位に最大径をもち、直立する短い口縁がつく。20～22は、唐津系の広口短頸の陶器壺。20、21は、胎土は緻密で暗赤褐色を呈す。20は、外面には不透明な黄緑褐色釉が施釉（自然釉？）され、内面には白土が部分的に掛けられている。21は、頸部に暗茶褐色の自然釉が付着。22は、胎土は緻密で暗灰色を呈す。頸部に暗茶褐色の自然釉が付着。23は、素焼きの皿。底面には回転糸切痕を残す。24～26は陶器皿。24は志野系の陶器皿。乳白色のやや粗い胎土で、高台回りを除き淡い緑色がかかった乳白色釉が施釉されている。見込みに胎土目痕を4ヵ所残す。25は、唐津系の陶器皿。灰褐色の緻密な胎土で、高台回りを除き乳白色釉が施釉されている。26は、唐津系の近世の陶器皿。胎土は乳白色で緻密、外面には高台周りを除き淡い緑色がかかった透明釉が、内面には濃緑色の透明釉が施釉され、見込には重ね焼きのための蛇の目釉剥ぎが施されている。27は、上面楕円形を呈す素焼きの器で、楕円形の粘土板の底部に手捏ねで体部を立ち上げている。内面ハケ目。28は、犬？の土製人形。

#### SK-213出土土器 (Fig. 11～13・PL. 9)

29～31は、素焼きの皿。いずれも口径10cm程度、底径3～4cm、体部は浅く口縁はやや外反しながら聞く。29底面は、糸切り後ナデ、30、31は回転糸切痕を残す。近世の製品か？32～34は、中世土器の土鍋。32は、瓦質の土鍋。内面ハケ目、外面ナデ。33は、口縁外面に粘土帶を巻き玉線状の口縁をもつ。内面ハケ目、外面ナ

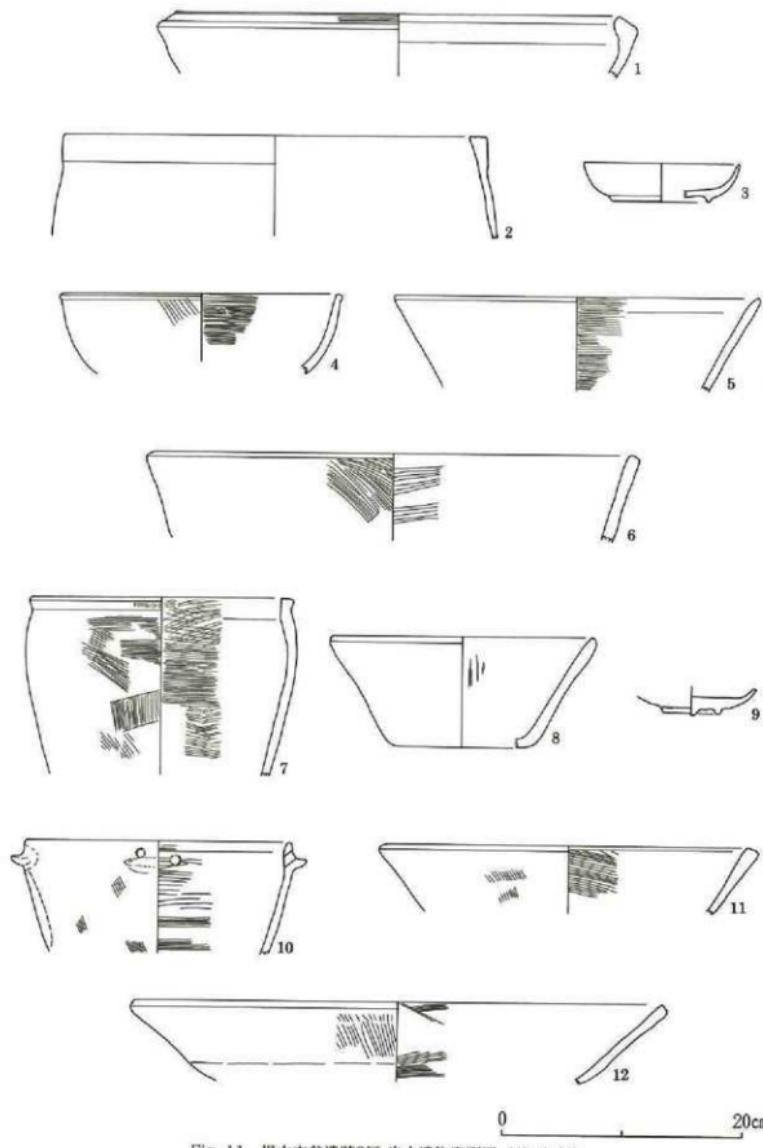


Fig. 11 堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (1) (1/4)

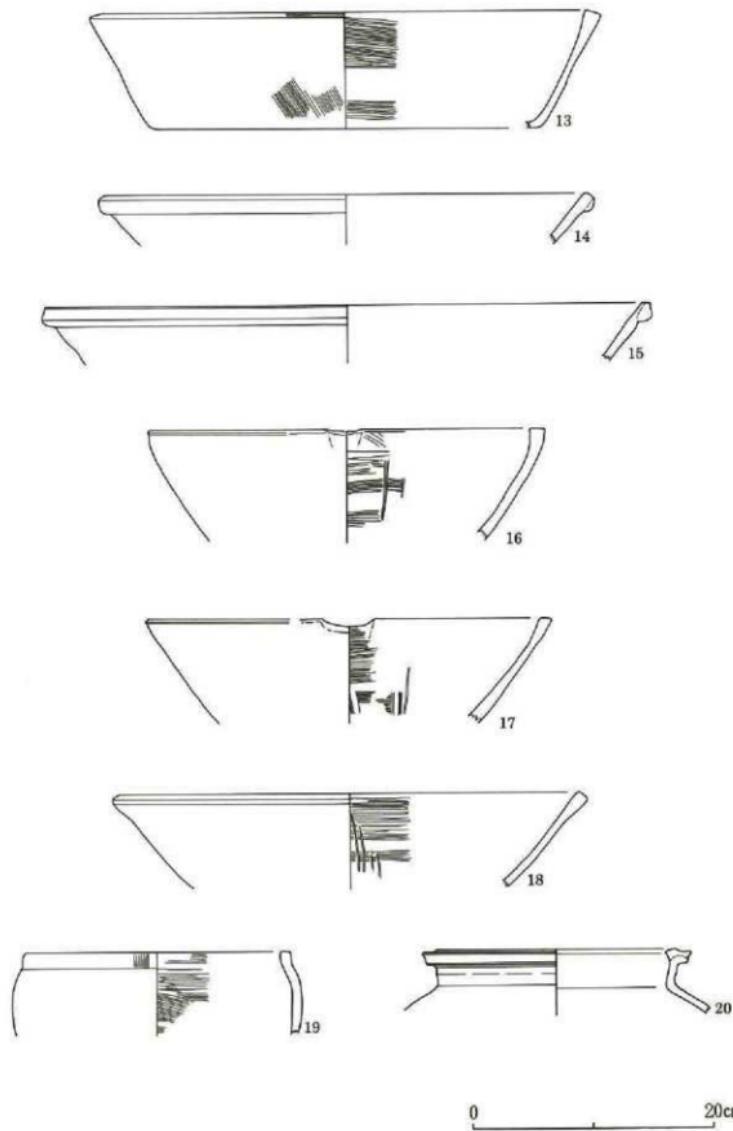


Fig. 12 堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (2) (1/4)

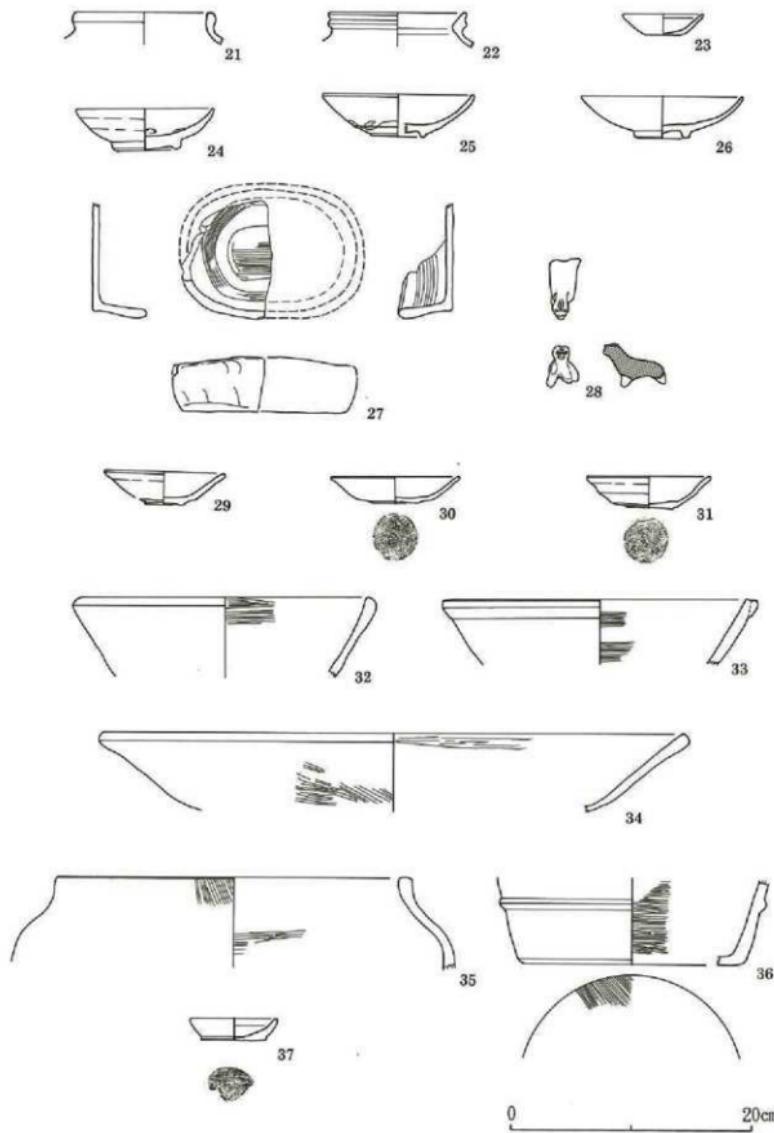


Fig. 13 堤六本谷遺跡2区 出土遺物実測図 (3) (1/4)

テ。33は浅く大ぶりの瓦質の土鍋。内外面ともにハケ目。35は瓦質の壺。胴部上位に最大径をもち、やや内傾する短い口縁がつく。口縁外面と胴部内面にハケ目。36は瓦質の甕または鉢。胴部下位にタガ状の断面三角形の凸帯がめぐる。内面、底部外面にハケ目。

#### SK-217出土土器 (Fig. 13)

37は、素焼きの皿。広い底部に内湾しながら開く短い口縁がつく。底部に回転糸切痕を残す。

#### 石器類 (PL. 10)

1は、磨製石斧。基部と刃部を失い、太い体部中央のみが8cm程遺存している。遺存部で断面は幅7.7cm、厚さ4.9cmの菱形に近い梢円形を呈す。遺存部の重量552g。玄武岩製。SK-213出土。2は、磨り石。長径7.1cm、短径5.9cmの上面觀梢円形を呈し、断面は厚さ2.2cmの扁平な梢円形を呈す。重量143g。粘板岩製。SK-211出土。3、4は、叩き石で、ともに遺構外出土。3は、4.9cm×4.6cm×4.4cmのはぼ球形を呈し、重量123g。砂岩製。4は、長径10.0cm、短径8.9cmの上面觀梢円形を呈し、断面は厚さ3.5cmの扁平な四角張った梢円形を呈す。重量406g。砂岩製。

### 5. 堤六本谷遺跡3区の調査

#### (1) 遺構 (Fig. 14, 15・PL. 3, 11・Tab. 4)

今回の調査区で最も東に位置する3区の調査では、遺構はK～O列、11～13Gr. 付近の一段高い部分に集中して検出された。それ以外の調査区西部分 (O～U列、10～12Gr. 付近) 及び南部分 (M～O列、12～16Gr. 付近) の一段低い部分は、後世、耕地として拓かれたときに、かなり削平を受けたものと見え、遺構は検出できなかつた。

これに対し、K～O列、11～13Gr. 付近の一段高い部分では、竪穴式住居址、弥生時代から近世にかけての土壙が検出されたほか、無数のビットが集中して検出された (PL. 11)。前述したが、このビット群の中には、建物を構成する柱穴も數多く含まれていることは推測できたが、あまりにも數が多く、個々の建物を特定するまでに至らなかつた。ここでは、誌面の都合で近世の陶器類を出土した遺構をのぞく、竪穴式住居址と考えられる遺構1軒、弥生時代から中世にかけての土壙4基について報告したい。

註) 「凡例」にも記したが、3区で検出された遺構については、調査員のミスによって、遺構番号を記した記録を紛失し、調査時に現地で各遺構に付した遺構番号と実際の遺構との照合ができない事態となつた。ここでは仮の遺構番号で報告することをお断わりしたい。

#### 竪穴式住居址 (Fig. 14)

SH-351は、O-11Gr. で検出された唯一の竪穴式住居址と考えられる遺構である。時期は不明で、一辺3.3mほどの方形の住居址と思われるが、西半部分が後世の耕地の段によって失われている。床面までの深さは10cm弱。床面の遺存部には大小のビットが検出されているが、主柱穴は不明である。主軸は、N-14°-E。出土遺物はない。

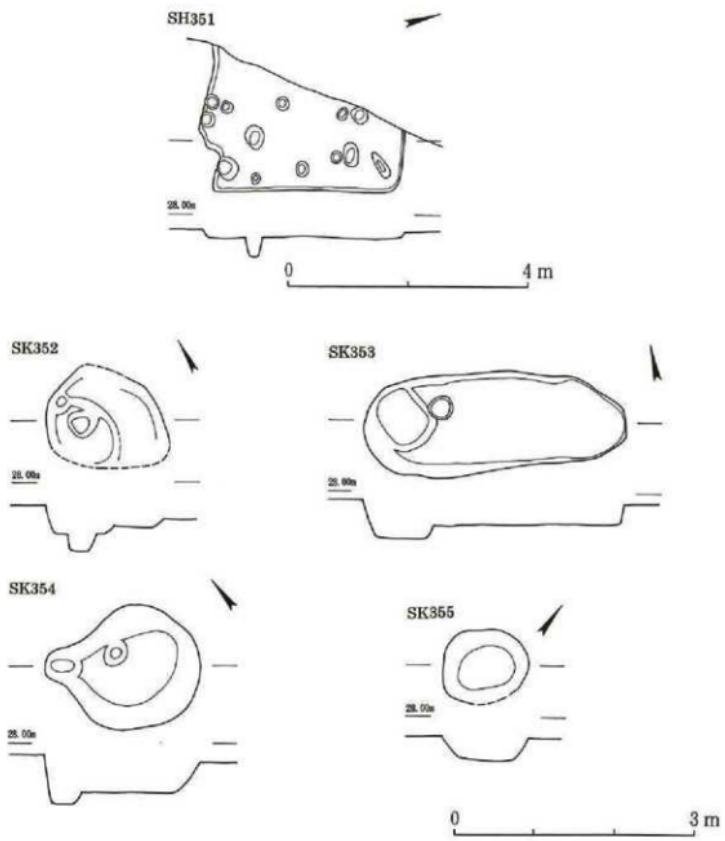


Fig. 14 堤六本谷遺跡3区 婴穴式住居址実測図SH-351 (1/80)・土壤実測図SK-352～SK-355 (1/60)

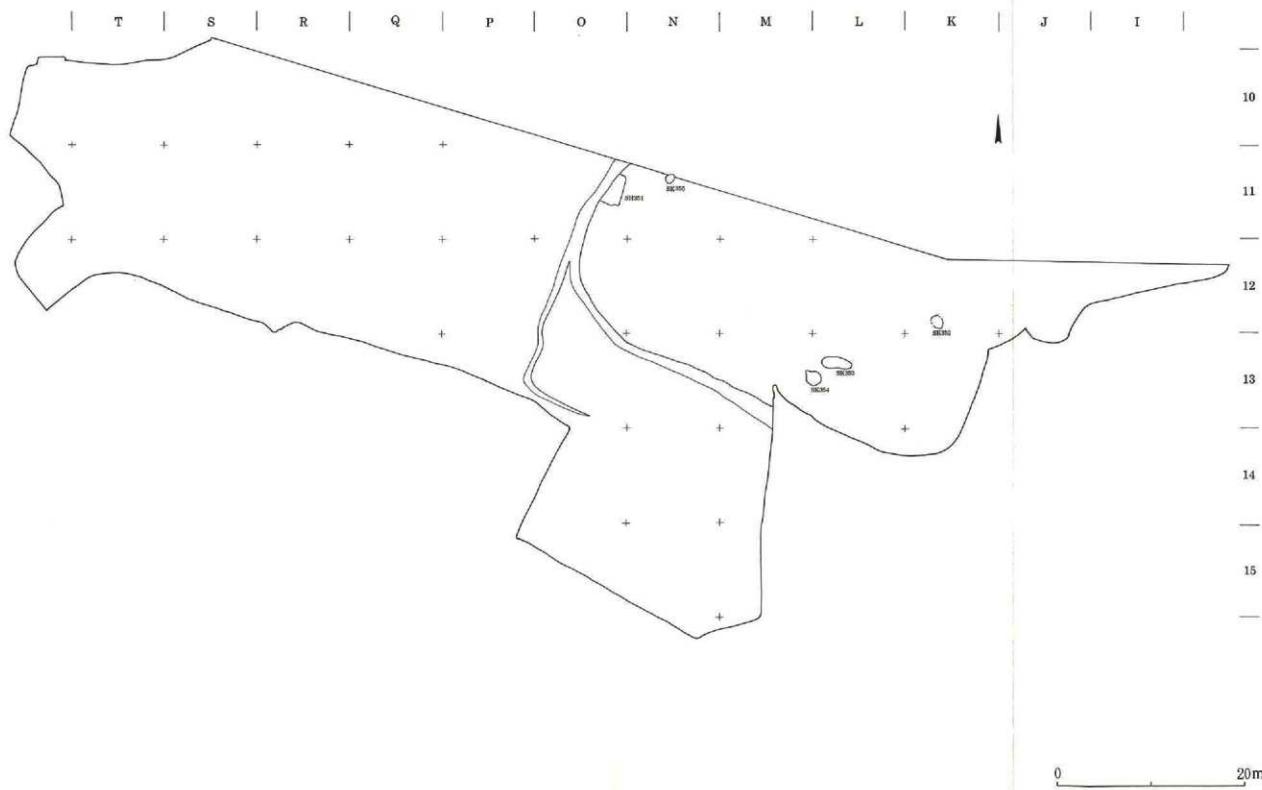


Fig. 15 堤六本谷遺跡3区 造構配置図 (1/400)

### 土壤 (Fig. 14・Tab. 4)

土壤は4基が検出された。以下、一覧表に形態、法量等を記す。

Tab. 4 堤六本谷遺跡3区 出土土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規模 (上段：上面、下段：底面、単位：m・m <sup>2</sup> )				柱穴状の ビットなど	出土 遺物	備 考
		長さ・直径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-352	不整円形	1.50 1.23	(1.2) (0.9)	0.23	(1.0)			
SK-353	不整 長楕円形	3.23 3.04	1.26 0.97	0.37	2.5			
SK-354	不整円形	1.92 1.28	1.50 0.78	0.60	0.8			
SK-355	不整円形	1.06 0.66	0.90 0.46	0.27	0.3			

### (2)遺物 (Fig. 16・PL. 11)

3区の調査で遺構から出土した遺物は、少量で、一部の弥生時代の遺物を除くと、ほとんどが中世から近世の所産になるものであった。ここでは、図示できる遺物のうち、土器類・土製品については代表的なものを報告したい。

註) この項では、調査時に現地で各遺構に付した遺構番号で報告する。

#### SK-301出土土器 (Fig. 21・PL. 11)

1は、土師器の壺。内面ナデ、外面ハケ目。

#### SK-302出土土器 (Fig. 16・PL. 11)

2、3ともに弥生式土器、2は、蓋。中央がやや高い傘状の円盤で、口縁部がわずかに内湾する。つまみの有無は不明。口縁より1.2cmの位置に焼成前に穿孔された直径4mm弱の小孔をもつ。内外面ともにナデ。3は外側が赤色塗彩された壺。胴部上位に胴部の最大径をもち、口縁部は断面逆L字型を呈す。口縁端部にはヘラ状の工具を連続押厚した刻み目が施され、口縁下部に1条、胴部中位に2条の断面「コ」の字型の凸帯がめぐる。外側は丁寧に磨かれ、口縁上面には直線4本一組を単位とした暗文が放射状に施され、口縁と口縁下部の凸帯の間および胴部中位の2条の凸帯の間には波状の暗文が施されている。

#### SK-303出土土器 (Fig. 16・PL. 11)

4は、土師器壺。平底で体部が直線的に開く。5、6は、土師器の皿。5は、平底で直線的に開く短い口縁がつく。6は、平底でやや外反しながら開く短い口縁がつく。

#### SK-307出土土器 (Fig. 16・PL. 11)

7は、素焼きの皿。口径9.6cm程度、底径4.4cm、平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁はやや外反しながら開く。底面は、糸切り後ナデ。8は、犬?の土製人形。

SK-308出土土器 (Fig. 16)

9は、土師器の高台付き碗。底部は平底で、「ハ」の字型に聞く高台がつく。体部は、腰の張りではなく直線的に聞く。口縁は遺存していない。

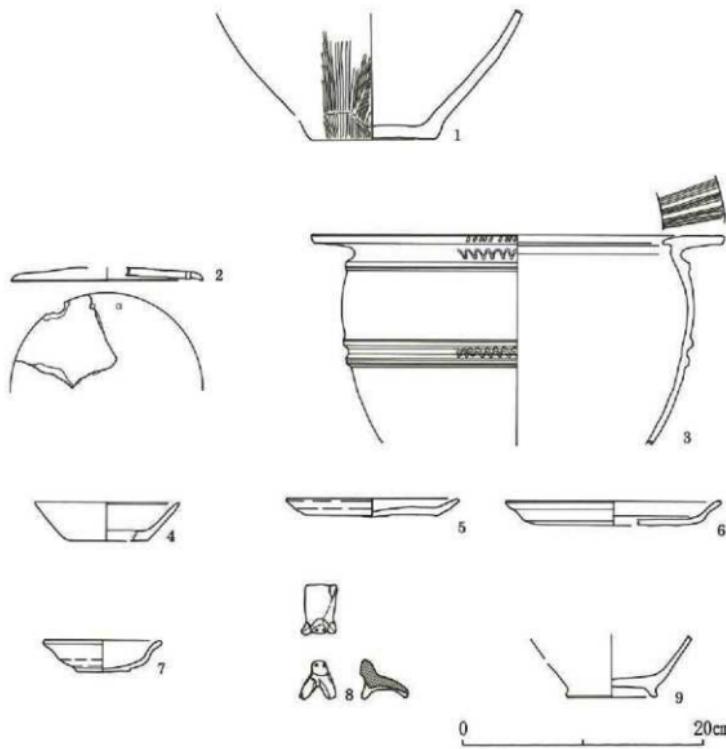


Fig. 16 堤六本谷遺跡3区 出土遺物実測図 (1/4)

#### 6. まとめ

堤六本谷遺跡は、高位段丘である青柳丘陵からヤツデの葉状に派生する低位段丘の支丘上に位置しており、今回の調査では、奇しくも1区、2区、3区とこのヤツデの葉の先端部分を調査した形となった。今回の調査では、弥生時代から中近世に及ぶ遺構が検出されたが、いずれの調査区も遺跡の周辺部にあたるため、まとまった所見

を記述できないが、確認調査及び本調査の成果から2点について述べ、まとめとしたい。

#### 堤六本谷遺跡の範囲と堤土塁跡について

前述のように堤六本谷遺跡は、堤土塁北方の青柳丘陵からヤツデの葉状に派生する低位段丘の支丘上に位置しており、今回の農業基盤整備事業に伴う確認調査で、新たに広がりが確認された遺跡であるが、遺構、遺物の検出範囲が標高25mの等高線とほぼ一致している。

ここで堤土塁の施設のうち、東側土塁の東端、八藤丘陵と接する部分にある「野越し」と地元で呼んでいる溝状の施設の基底部の標高が24.5mであることに注目したい。「野越し」は溜池などの水位調節の施設の当地での呼称であるが<sup>4</sup>、堤土塁にも同様の呼称で呼ばれる溝が存在する。これを仮に、増水時に堤防（土塁）の決壊を防止するため、余分な水をオーバーフローさせるための施設と想定した場合、堤土塁の北側の谷底平野部一帯に標高24.5mの等高線を水際線とした人造湖を想定できるのではないだろうか。

確認調査においても標高24m以下の耕地部分では、遺構、遺物はほとんど検出されず、耕作土の下部には、砂層、砂質粘土層などの水性堆積物が堆積していたことなど考え合わせると、堤土塁の後背地にはある時期まで水が貯められていた可能性が高いといえよう。

#### 近世「大鳥居」集落について

今回の堤六本谷遺跡の調査では、ここに報告してきた中世以前の土壤などの遺構のほか、とくに2区、3区から近世後期（18世紀後半～19世紀前半）の所産と考えられる土壤、溝跡のほか、埋め甕、ピットなどかなりの量の遺構が検出されている。これらは、かつて堤集落から派生し、以前この区域にあったと言われている近世「大鳥居（ううどい）」集落の遺構であろうことは想像に難くない。

本来ならば、この近世の遺構、遺物についてもここで報告すべきではあったが、誌面の都合で割愛させていたいた。これらについては、調査に携わったものの責務として、今後折を見て報告していきたい。

## IV. 平成6年度屋形原遺跡3区の調査

### 1. 屋形原遺跡と調査区の概要 (Fig. 3)

屋形原遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本松の「屋形原丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m～27m付近）に位置している。屋形原丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脅振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する丘陵で、県道佐賀川久保鳥栖線の南へと舌状に延びる丘陵となっている。東方の青柳丘陵、西方の二塚山丘陵とは、それぞれ、東は切通川本流、西は切通川支流の屋形原川によって分かれている。

本丘陵は、県道佐賀川久保鳥栖線の屋形原交叉点（標高30m付近）を中心とした一帯が現在屋形原集落として利用されており、この一帯が屋形原遺跡、集落より北側の小丘陵一帯が屋形原古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られており、県道北側に位置するフランスペッド佐賀工場建設の際には、かなりの遺構、遺物が発見されたと言われている。これに対して、現集落南部に広がる低位段丘上については、これまで埋蔵文化財の所在の有無について不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、昭和63年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、集落の南部の低位段丘部分において弥生時代、奈良時代の遺構・遺物が検出され、新たに7,500m<sup>2</sup>ほどの遺跡の広がりが確認され、これまでの屋形原遺跡の範囲を南の田面一帯に拡大し、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。

屋形原遺跡のうち、平成6年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本松に所在する、現屋形原集落南方一帯の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予想される部分1,750m<sup>2</sup>部分について、調査区名を3区として発掘調査を実施した。

今回の調査では、調査区全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを設定した。グリッドは、南北列北から3～10の8列、東西列東からH～Mの6列を設定し調査を実施した。

調査区域は現在主に水田として利用され、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土あるいは水田底土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

### 2. 調査の経過

平成6年度の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、梅雨明けの7月20日より着手。以下調査の経過を簡略に記す。

7月20日、屋形原遺跡3区を含む、平成6年度の農業基盤整備事業に伴う屋形原遺跡の重機による表土剥ぎを開始。8月13日から16日まで、お盆のため作業休止。

町内坊所地区にて実施していた民間開発に係る発掘調査終了後の、8月22日、現地にて簡単な調査の安全祈願を行い作業員による遺構検出作業に着手した。遺構検出作業は調査区西部から実施し、ある程度の遺構が検出されたところで逐次遺構の掘下げ作業を行った。掘下げ作業が終了した遺構から必要に応じて写真撮影を行い、調査範囲を調査区西部へと広げていった。

遺構の一応の掘下げ作業が終了した11月18日、遺構の詳細実測作業を開始。

12月24日から平成7年1月8日まで年末年始の休業。以後、遺物の取上げなどを行い、1月27日気球による全体写真を撮影し、1月31日に現地での作業を終了した。

その後、3月28日まで文化財整理事務所にて、出土遺物の水洗い、記録類の整理作業などを行い、平成6年度の調査を終了した。

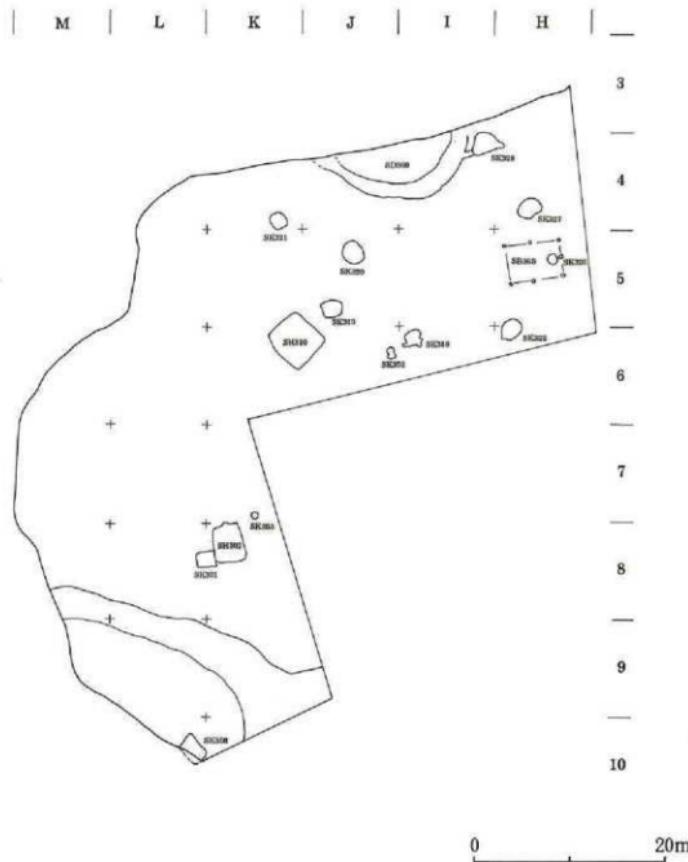


Fig. 17 屋形原遺跡3区 造構配置図 (1/500)

### 3. 遺構 (Fig. 17~21・PL. 4、12~14)

屋形原遺跡3区の調査で検出された遺構は、近世以降の所産になると考えられるものを除くと、堅穴式住居址2軒、掘立柱建物址1棟、溝跡1条、土壙12基、その他ピットなどであった。調査区が丘陵の北西縁辺部に位置するために、遺構の密度はそう高くはない。以下、ピットを除く各遺構について簡単に報告する。

#### (1) 堅穴式住居址 (Fig. 18・PL. 12)

堅穴式住居址と考えられる遺構は、奈良時代のSH-302と古墳時代後期のSH-310の2軒が検出された。

##### SH-302 (Fig. 18・PL. 12)

SH-302は、K-8Gr.で検出された堅穴式住居址である。長辺3.9m、短辺2.9mほどのやや不整方形の住居址で、北壁の中央からやや東に偏った位置にカマド様の施設の跡であろうか0.4m×0.4m程の馬蹄形の突出部をもつ。床面までの深さは30cm。主柱穴は不明である。主軸は、N-15°-W。土師器の甕などが出土している。

##### SH-310 (Fig. 18・PL. 12)

SH-310は、K-5、K-6Gr.付近で検出された堅穴式住居址である。長辺5.1m、短辺4.4mほどのやや不整方形の住居址。床面までの深さは10cm弱。主柱穴は不明である。主軸は、N-56°-W。土師器の甕、高壙、須恵器の壺などが出土している。

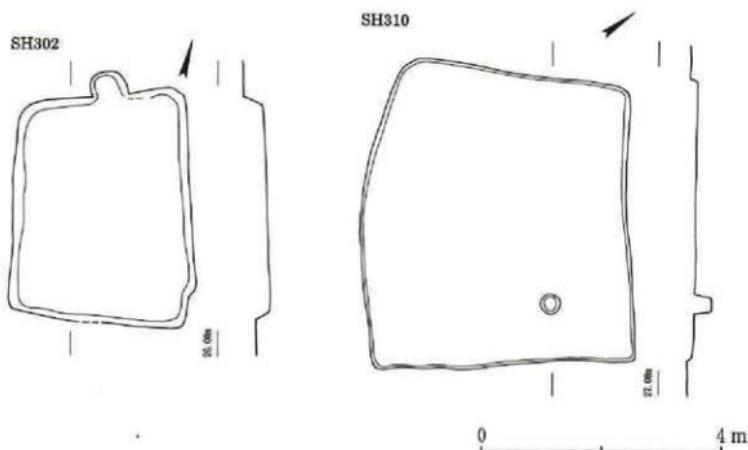


Fig. 18 屋形原遺跡3区 堅穴式住居址実測図SH-302・SH-310 (1/80)

(2) 挖立柱建物址 (Fig. 19)

掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-365の1棟であった。柱穴などからの出土遺物は皆無で、時期は特定しがたい。

SB-365 (Fig. 19)

SB-365は、H-5Grで検出された2間×2間の掘立柱建物址。主柱穴は、直径50cm～70cm、深さ20cm～50cm程度の円形の掘り方。桁行の柱間は平均2.8m、梁行の柱間は1.9m。規模は桁行5.6m、梁行3.8m、床面積21.3m<sup>2</sup>。主軸は、N-79°-Eである。

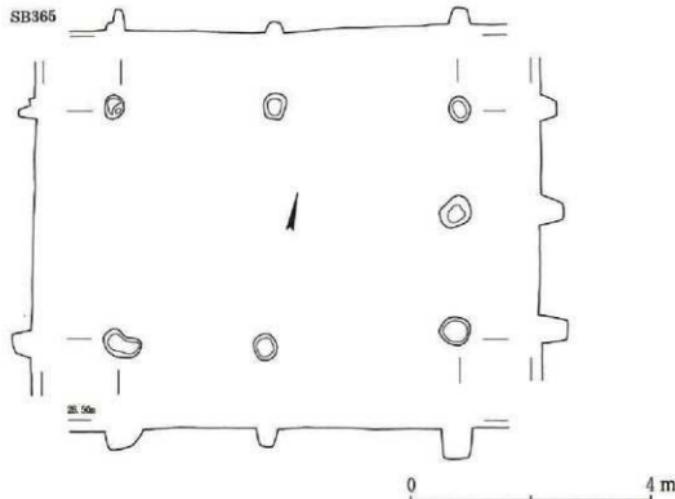


Fig. 19 屋形原遺跡3区 掘立柱建物址実測図SB-365 (1/80)

(3) 土壙 (Fig. 20・PL. 13, 14)

土壙は、12基が検出された。出土遺物により時期が特定できるものとしては、それぞれ縄文式土器とともに石鏃や石錐を出土したSK-320が縄文時代後期、土師器の壺や壺を出土したSK-301、SK-321、SK-328、SK-352、SK-353が奈良時代、SK-358が中世の所産と考えられる。以下、一覧表に形態、法量等を記し報告する。

Tab. 5 屋形原遺跡3区 出土土壙一覧表

遺構番号	平面形態	規模 (上段:上面、下段:底面、単位:m・m <sup>2</sup> )				柱穴状の ピットなど	出土 遺 物	備 考
		長さ	幅	短径	深さ			
SK-301	方形	2.00 1.84	1.68 1.48		0.34	2.7	土師器壺・壺 須恵器壺	

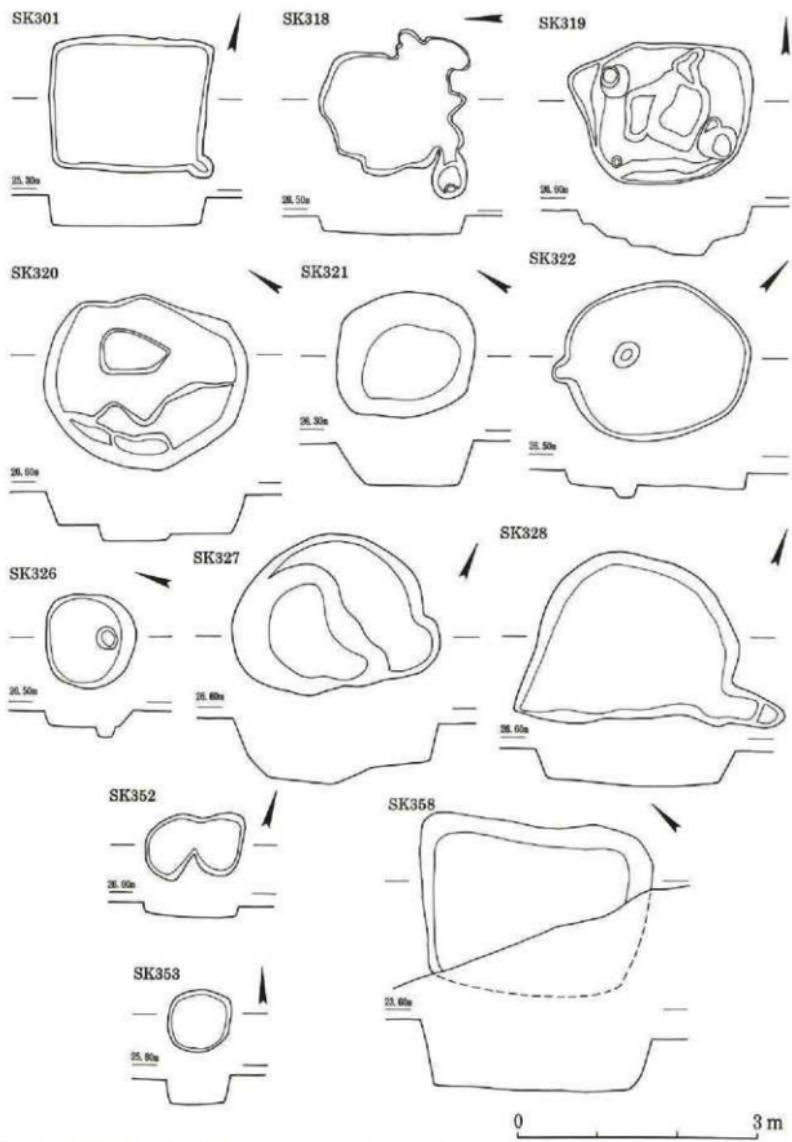


Fig.20 屋形原遺跡3区 土壌実測図SK-301・SK-318~322・SK-326~328・SK-352・SK-353・SK-358 (1/60)

Tab. 5 屋形原遺跡3区 出土土器一覧表（続き）

遺構番号	平面形態	規模（上段：上面、下段：底面、単位：m・mm）				柱穴状の ピットなど	出 土 遺 物	備 考
		長さ	幅・短径	深さ	底面積			
SK-318	不整形	1.82 1.70	1.70 1.60	0.20	2.1			
SK-319	不整円形	2.22 1.98	1.72 1.62	0.34	2.7			
SK-320	不整円形	2.50 2.18	2.12 1.90	0.42	3.2		縄文式土器鉢・浅鉢・石鏡・石錐	
SK-321	不整円形	1.72 1.16	1.55 0.92	0.50	0.9		須恵器皿	
SK-322	不整円形	2.30 2.10	1.92 1.78	0.18	3.1			
SK-326	不整円形	1.13 1.02	1.12 0.86	0.17	0.7			
SK-327	不整形	2.56 2.00	1.86 1.70	0.77	2.6			
SK-328	不整形	2.60 2.33	2.04 1.78	0.36	3.6		須恵器環	
SK-352	不整形	1.22 1.12	0.82 0.65	0.13	0.5		土師器環・皿	
SK-353	円形	0.78 0.67	0.76 0.66	0.31	0.4		須恵器環蓋	
SK-358	不整方形	2.90 2.40	※2.0 ※1.7	0.77	※3.9		土師器碗・壺 土製支脚	

**(4)溝跡 (Fig. 21・PL.12)**

SD-360は、I-4、J-4Gr.で検出された溝跡で、北側は後世の耕地の段によって削平されている。幅0.8m～1.6m、深さ30cm～50cmの円弧状の「U」字溝。出土遺物はないが、その形状から墳丘の直径7m～8m程度の円墳の周溝かとも考えられる。

**4. 遺物 (Fig. 22、23・PL.14、15)**

屋形原遺跡3区の調査で各遺構から出土した遺物のうち図示できる遺物について、土器類・土製品については代表的なものを遺構ごとに報告し、その他の石器類は、器種ごとに報告したい。

**SK-301出土土器 (Fig. 22・PL. 14)**

1、2は、焼成不良の須恵器の环と思われる土師器様の明赤褐色を呈す。1は、体部は直線的に開き口縁に至る。2は、須恵器の环。体部はやや内湾しながら立ち上り、口縁はやや外反する。3、4は、土師器の甕で、如意形に開く口縁をもつ。3は内面ナテ、外面は器面が荒れているかへラケズリか。4は、内外面共にへラケズリ。

**SH-302出土土器 (Fig. 22)**

5は、土師器で、深めの胴部に内湾する口縁がつく、遺存部外面に火を受けた形跡がないことから甕ではなく鉢かと思われる。6は、土師器の甕で、口縁は如意形に開く。内面へラケズリ、外面ハケ目。

**SH-310出土土器 (Fig. 22)**

7は土師器の甕または壺。口縁下部が緩やかにくびれ、外反しながらやや開く口縁はをもつ。口唇外面はつままれ玉縁状を呈す。外面はハケ目。8も土師器の甕。胴部中位に最大径をもち、肩は緩やかに丸味を帯び、口縁は外反しながら開く。内面へラケズリ、外面ハケ目。9は、須恵器の环。浅い丸底の底部の环で、内傾しながら

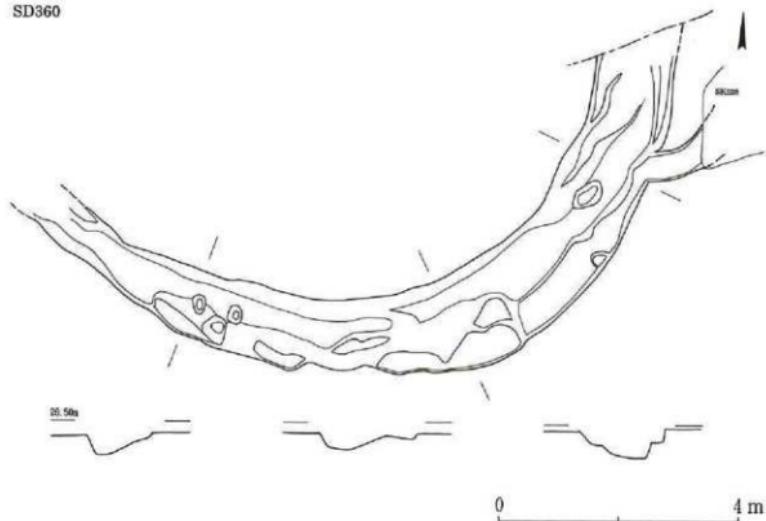


Fig. 21 屋形原遺跡3区 溝跡実測図SD-360 (1/80)

小さく外反する短い受けをもつ。底面にはヘラケズリ痕を残す。10は土師器の高环の脚部。その部は外反しながら開き、器端部は玉緑状を呈す。内外面ともにナデ。11は、土師器の小型の甕。口縁下部にくびれをもち、直線的に外傾する口縁がつく。内面ヘラケズリ、外面ナデ。

## SK-320出土土器 (Fig. 22, 23 · PL. 14)

12から19は、いずれも繩文式土器。12は、粗製の深鉢、口縁はやや外反しながらほぼ直立する。13, 14は深鉢または鉢の低部破片。14は円形の粘土板で外周に胴部を立ち上げている。15は、深鉢。口縁と胴部の境界が「く」の字形に屈折し、口縁は外反しながら直立する。口縁外面に3条の沈線がめぐる。16~18は、口縁と体部の境界が「く」の字形に屈折する浅鉢で、それぞれ短い口縁が立ち上がる。16は、口縁が外反しながら直立する。口縁下部に2条の沈線がめぐる。17は、やや内傾した短い口縁がつく。18は、16と同一個体かとも思われるが、口縁がやや開く。19は高环の体部か。「く」の字形に屈折し上部が大きく開く。

## SK-321出土土器 (Fig. 23 · PL. 15)

20は、須恵器の皿。平底の体部に直線的に外傾する短い口縁がつく。

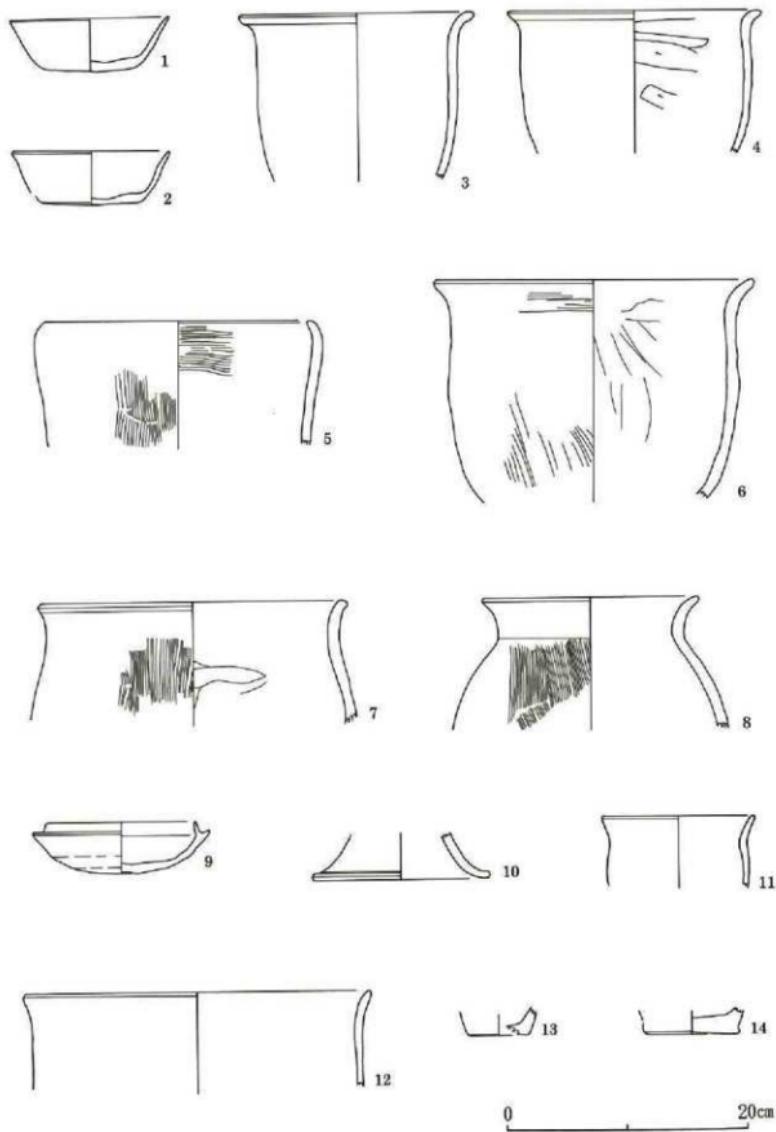


Fig.22 屋形原遺跡3区 出土遺物実測図 (1) (1/60)

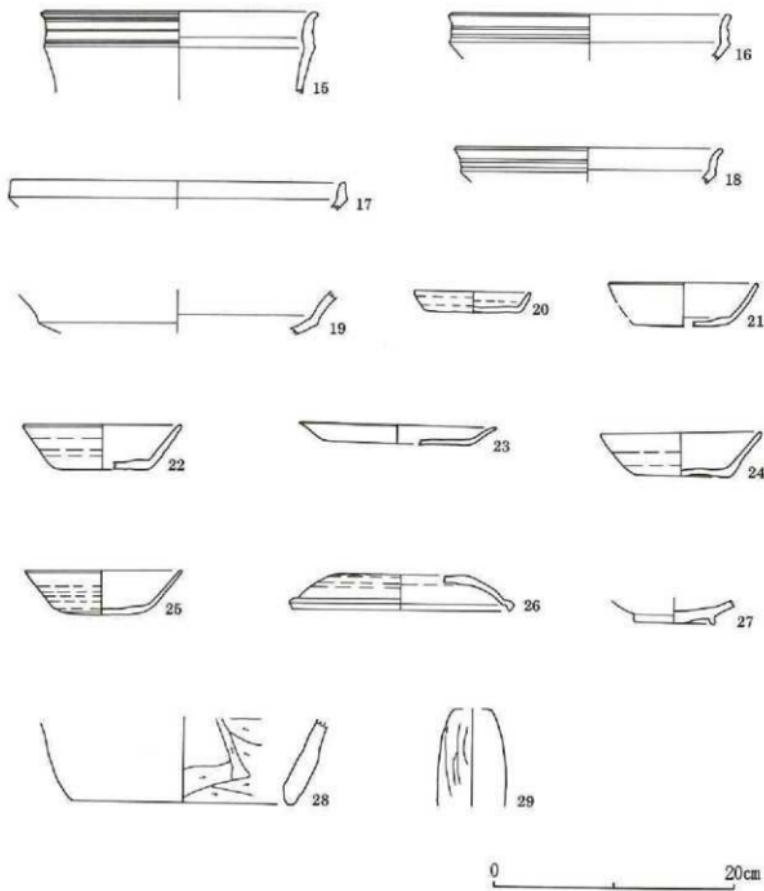


Fig.23 星形原遺跡3区 出土遺物実測図 (2) (1/60)

### SK-328出土土器 (Fig. 23 · PL. 15)

21、22は、須恵器の壺。21は、平底の体部にやや内湾しながら開く口縁がつく。22は、平底の体部に直線的に外傾する口縁がつく。

### SK-352出土土器 (Fig. 23 · PL. 15)

23から25は、土師器の皿、壺。23は、皿で、平底の浅い体部に外反しながら大きく開く口縁がつく。24、25は、土師器の壺。24は、平底の体部に直線的に外傾する口縁がつく。25は底面がやや丸味をもち、口縁は直線的に開くが口唇端部が小さく外反する。器壁が薄く、胎土もこの遺構から出土した他の土師器の壺とはやや異質である。26は、須恵器の壺蓋。やや高めの天井部をもち、口縁部は玉縁状に丸みを帯びている。口縁端部は断面逆三角形の受けをもつ。

### SK-358出土土器 (Fig. 23 · PL. 15)

27は、土師器の碗。丸底の体部にやや「ハ」の字形に開く低い高台がつけられている。28は土師器の懶。直線的に開く分厚い脚部下部のみ遺存している。内面ヘラケズリ、外面ナテ。29は、土製支脚。砲弾の先端を切り落としたような形態の粘土塊で作られた支脚で、断面は円形を呈す。基部は失われ上部が9cmほど遺存している。直径は、上面で4.0cm、遺存部の最大径は5.6cm。

### 石器類 (PL. 15)

1～3は、石鎚。いずれもサスカイト製。1は、凹基式で両側辺の中央が浅く抉られている。2、3は、やや縱長の平基式。4～6は石錐と考えられるもので蛇紋岩系統の石材。4は、上面幅はやや四方が張った円形に近い小判形を呈し、断面は扁平な小判形を呈す。上下（写真←部分）に、網に糸を結びつけるための小さな打ち欠きをもつ。5、6は、上面幅は矩形を呈す扁平な石片。いずれも糸を止めるための打ち欠きは見えないが、その形状から石錐と考えられる。5は、断面は扁平な矩形を呈す。6は、断面は中央がやや膨らみ両側面が薄い凸レンズ形を呈す。一部（写真左上部分）を失っている。角石器の法量などは、下記一覧表に記す。

Tab. 6 星形原遺跡3区 出土石器等一覧表

遺物番号	器種	出土遺構	法量 (cm · g)				材質	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
1	石鎚	SK-320	3.0	1.7	0.4	1.5	サスカイト	
2	石鎚	SK-320	2.7	1.3	0.4	1.5	サスカイト	
3	石鎚	遺構外	3.1	1.3	0.4	1.7	サスカイト	
4	石錐	SK-320	10.8	10.0	1.6	281.7	蛇紋岩系	
5	石錐	SK-320	9.4	5.9	0.9	108.9	蛇紋岩系	
6	石錐	SK-320	※8.6	6.9	1.4	※146.5	蛇紋岩系	

## 5. まとめ

今回の屋形原遺跡3区の調査で検出された遺構や遺物は、量的には決して多いとはいえないが、縄文時代、古墳時代、それに奈良時代以降の遺構、遺物が検出された。以下に調査の所見を列記しまとめとしたい。

### SK-320出土遺物について

SK-320出土遺物は、土器の特徴から縄文時代後期の後半の時期と考えることができる。今回のこれらの土器とともに、石錐と考えられる石器が供伴している。上峰町内で過去の漁撈具が発見されたのは、不時発見の例を含めても今回が初めての例であり、比較的縄文時代遺跡の調査例に乏しいこの地域にあって、今後、当時の生業のあり方を考える上で貴重な資料と言えよう。

### SH-310出土遺物について

鳥栖市から大和町にかけての佐賀県東部では、山麓部から南へ向って派生する中位、低位の洪積世段丘上に、弥生時代の集落・墳墓を中心に各時代の遺跡が立地している。そして、これらの遺跡が立地する中位、低位の段丘の後背地にあたる北方の高位段丘や山麓部には、古墳時代後期の円墳が点在し、尾根や谷を単位として古墳群を形成している。上峰町内においても、県道鳥栖川久保佐賀線、九州横断自動車道付近に屋形原、奥の院、鎮西山南麓、青柳、新立、谷渡などの古墳群の存在が知られている。しかし、これまで、町内のこれらの古墳群を残した集団の集落については、調査例も少なく不明な点も多かったといえる。

このようななか、今回の調査において古墳時代の竪穴式住居址であるSH-310が検出された。出土した須恵器壺や土師器甕から見て、古墳時代後期に営まれた住居址と考えられる。さらに想像を逞しくすると、本遺跡北側の同一丘陵上の屋形原古墳群を残した集団の集落の一部と考えることができよう。今回の調査では、1軒ではあったが当時の住居址を検出できた。今後、このような調査例の増加をまって、上峰町内の古墳時代後期の各古墳群とそれらを残した集落との関連を考えていきたい。

# 図 版





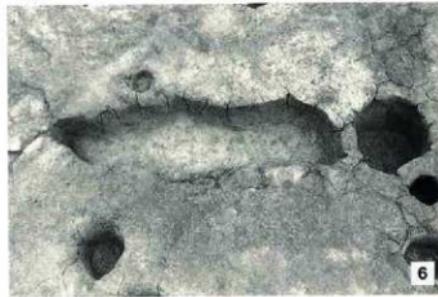
1



5



2



6



3



7



4



8

1. SK-101 (北より)

2. SK-102 (南西より)

3. SK-111 (東より)

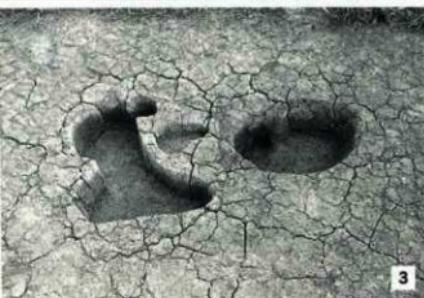
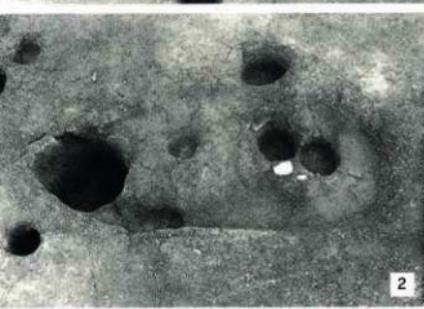
4. SK-114 (南より)

5. SK-116 (北より)

6. SK-117 (北東より)

7. SK-122 (北西より)

8. SK-123 (東より)



1. SK-121・124 (北西より)

2. SK-125 (北西より)

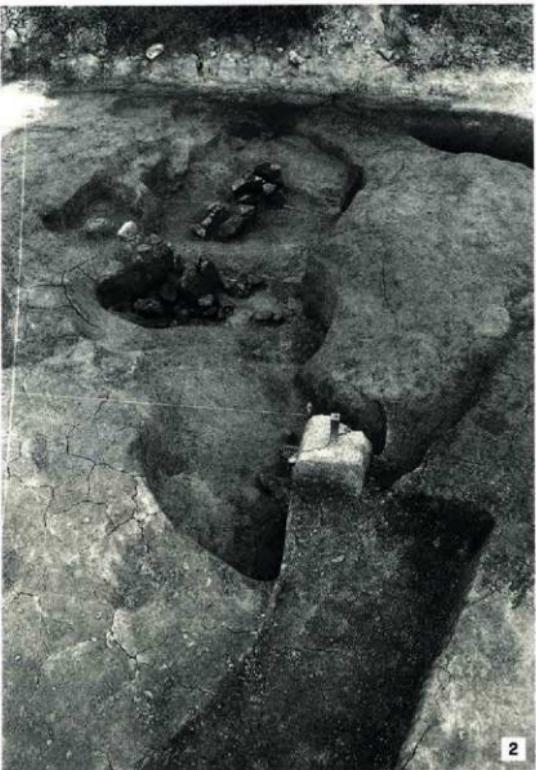
3. SK-120・126 (北西より)

4. SK-127・128 (北より)

5. SK-129 (北より)



1



2

1. SK-209 (南東より)

2. SK-211~213 (西より)



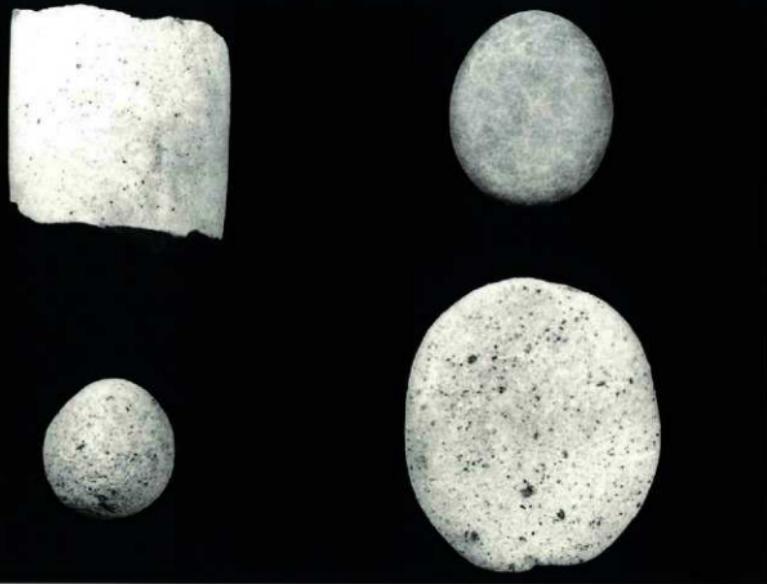
1.  
2. } 24 SK-211  
3.

4.  
5. } 25 SK-211  
6.



1.  
2. } 26 SK-211  
3. }

4. 27 SK-211  
5. 30 SK-213  
6. 31 SK-213



上) 1. 石斧 SK-213 · 2. 磨石 SK-211

下) 3 · 4. 印き石



1



2



4



3



5

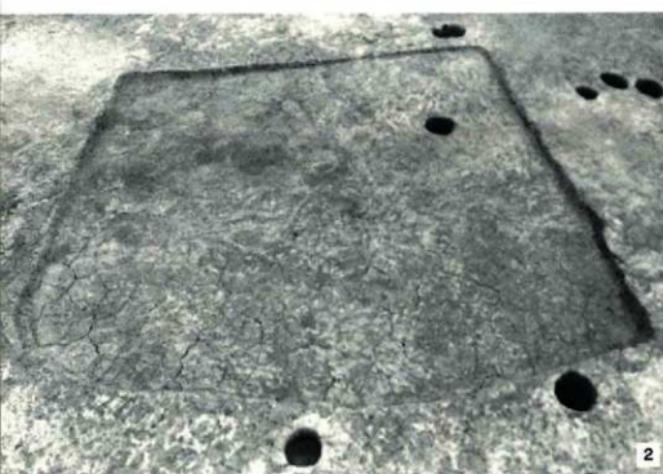
1. 3区造構集中部分 (写真上方が北)

2. 1 SK-301

3. 3 SK-302

4. 6 SK-303

5. 7 SK-307



1. SH-302 (南より)  
2. SH-310 (南西より)  
3. SD-360 (西より)



1. SK-301 (南より)

2. SK-318 (西より)

3. SK-319 (東より)

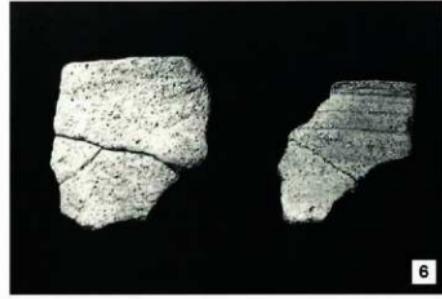
4. SK-320 (北東より)

5. SK-321 (北東より)

6. SK-322 (北より)

7. SK-326 (西より)

8. SK-327 (北東より)



1. SK-328 (南西より)

2. SK-353 (南より)

3. SK-358 (北東より)

4. 1 SK-301

5. 2 SK-301

6. 左) 12 右) 15 SK-320

7. 左) 18 右) 19 SK-320



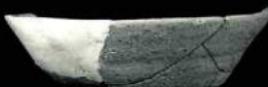
1



2



3



4



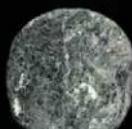
5



6



7



8

1. 20 SK-321

2. 21 SK-328

3. 23 SK-352

4. 24 SK-352

5. 25 SK-352

6. 29 SK-358

1. 石罐 1・2. SK-320・3. 表採

2. 石錐 4～6. SK-320

報 告 書 抄 錄

ふりがな	つつみろっぽんだにいせきⅠ やかたばるいせきⅡ							
書名	堤六本谷遺跡Ⅰ 屋形原遺跡Ⅱ							
副書名	平成2・6年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	上峰町文化財報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	原田 大介							
編集機関	上峰町教育委員会							
所在地	〒849-0123 佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4 上峰町民センター内 Tel/Fax 0952-52-3833							
発行年月日	2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'"	°'"			
堤六本谷遺跡	佐賀県三養基郡 上峰町大字堤 字六本谷、二本 柳	41345	3035 4005 5011	33°20'41" 5 1991.3.19	130°25'27" 5	1990.6.8	5,200m <sup>2</sup>	農業基盤 整備事業
屋形原遺跡	佐賀県三養基郡 上峰町大字堤 字一本松		2002 3014	33°20'43"	130°25'11" 5 1995.1.31	1994.7.20	1,750m <sup>2</sup>	農業基盤 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堤六本谷遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代 中世・近世	堅穴式住居址 掘立柱建物址 土壙	1軒 2棟 40基	弥生式土器（後期） 石器類 土師器・須恵器 中世土器・陶器 土製品 近世陶磁器			
屋形原遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 中世	堅穴式住居址 掘立柱建物址 土壙 溝跡	2軒 1棟 12基 1条	縄文式土器（後期） 石器類 土師器・須恵器			

上峰町文化財調査報告書第17集

## 堤六本谷遺跡I・屋形原遺跡II

平成12年3月20日印 刷

平成12年3月31日発 行

編 集 行 上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印 刷 株式会社三光

佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1

